

福岡県指定史跡

# 伊 方 古 墳

福岡県指定史跡

# 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅

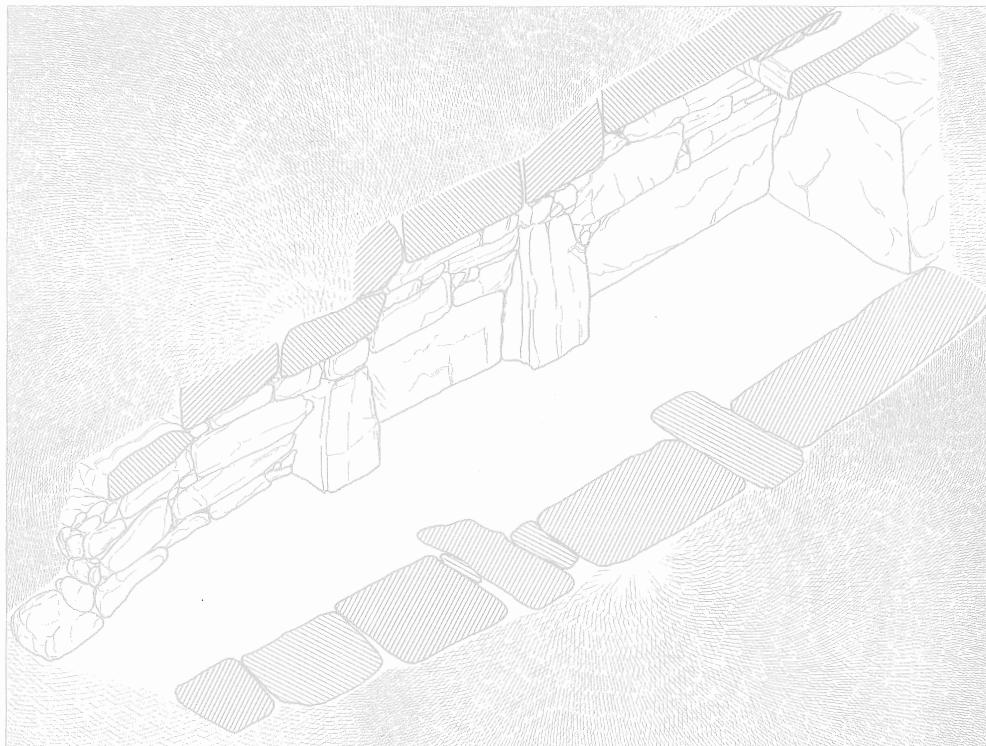
弥生・古墳時代墳墓群

# 野 添 遺 跡 群

福岡県田川郡方城町所在遺跡の発掘調査報告書

方城町文化財調査報告書

第5集



1998

方城町教育委員会

福岡県指定史跡

# 伊 方 古 墳

福岡県指定史跡

# 方城岩屋磨崖梵字曼茶羅

弥生・古墳時代墳墓群

# 野 添 遺 跡 群

福岡県田川郡方城町所在遺跡の発掘調査報告書

方城町文化財調査報告書

第 5 集

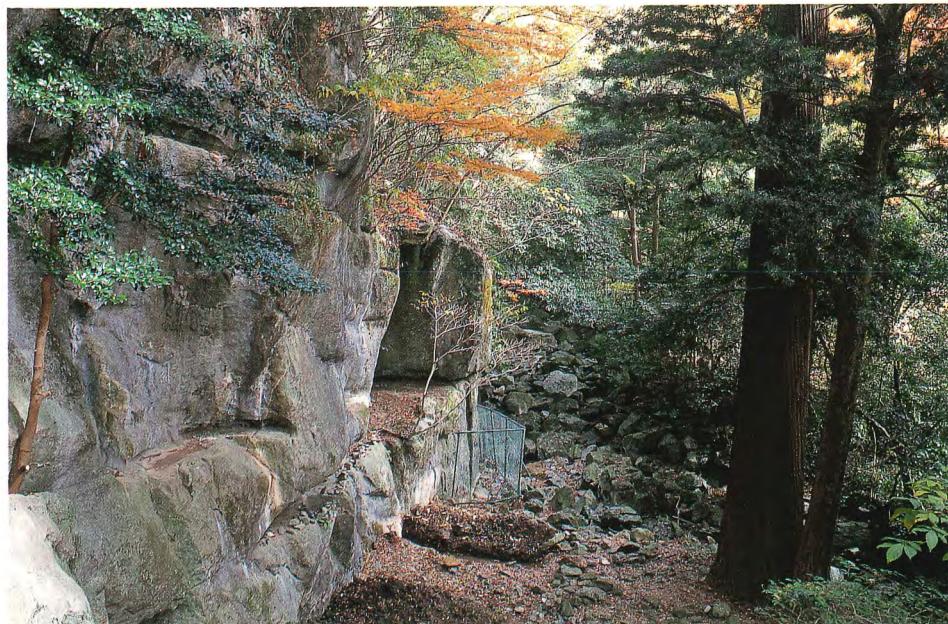
1998

方城町教育委員会

卷頭図版



(1) 福岡県指定史跡 「伊方古墳全景」(北東から)



(2) 福岡県指定史跡 「方城岩屋磨崖梵字曼荼羅」および  
福岡県指定天然記念物「岩屋の大スギ」(南西から)

# 序

田川郡の北端部に位置する方城町は、福智山系から派生する丘陵に立地しながら、遠賀川の支流である彦山川に面しており、地理的な条件には大変恵まれています。したがって、歴史的にも交通の要衝に位置し、各種の文化財が現在まで豊富に遺されています。

本書は、福岡県指定史跡「伊方古墳」、福岡県指定史跡「方城岩屋磨崖梵字曼荼羅」、および野添遺跡群の発掘調査に関する記録です。

伊方古墳は、田川地域はもちろん、福岡県内においても屈指の長さを誇る横穴式石室を有する古墳です。方城岩屋磨崖梵字曼荼羅は、建武2(1335)年に製作された修驗道資料として重要です。野添遺跡群は、宅地建設に際して発見された弥生時代から古墳時代にかけての墓群です。

いずれも、彦山川流域の文化を考えるうえで重要な遺跡であり、埋蔵文化財に対する理解と認識の向上、さらには学術資料として広く利用していくだければ幸甚です。

最後に、発掘調査に協力していただいた地元の方々をはじめ、ご協力とご指導を賜った福岡県教育庁指導第二部文化課および福岡県教育庁筑豊教育事務所に対し、心より厚くお礼申しあげます。

平成10年3月31日

方城町教育委員会

教育長 渡邊健司

## 例　　言

1. 本書は、平成9年度に方城町が実施した、福岡県指定史跡「伊方古墳」と福岡県指定史跡「方城岩屋磨崖梵字曼荼羅」、および平成2年度に実施した「野添遺跡群」の発掘調査の記録である。
2. 発掘調査および報告書作成は方城町教育委員会が主体となり、福岡県教育庁筑豊教育事務所の援助を受けて実施した。
3. 本書に掲載した遺構図は、伊方古墳・方城岩屋磨崖梵字曼荼羅については石谷敏行・福高教晃の補助を受けながら水ノ江和同が、野添遺跡群については新原正典（現・福岡県教育庁指導第二部文化課）がそれぞれ作成した。
4. 本書に掲載した遺構写真は、伊方古墳・方城岩屋磨崖梵字曼荼羅については水ノ江和同が、野添遺跡群については新原正典がそれぞれ撮影した。遺物の撮影は、九州歴史資料館において北岡伸一が撮影した。また、伊方古墳の上空からの写真は、空中写真企画に委託した。
5. 出土遺物の整理・復原作業は九州歴史資料館で、実測作業および図面の浄書等は福岡県文化課太宰府事務所で実施した。また、鉄器の保存処理は九州歴史資料館の横田義章が行なった。
6. 本書において使用した方位はすべて磁北である。
7. 本書の執筆は、伊方古墳・方城岩屋磨崖梵字曼荼羅については福高と水ノ江が、野添遺跡群については新原が実施した。なお、方城岩屋磨崖梵字曼荼羅「3. 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅と福智山」については楠井隆志（福岡県教育庁指導第二部文化課）が行なった。
8. 本書の編集は、伊方古墳・方城岩屋磨崖梵字曼荼羅については水ノ江が、野添遺跡群については新原が実施した。

# 本文目次

I 伊方古墳（福高・水ノ江）	
1. はじめに—調査の経緯と組織—	1
2. 位置と環境	2
3. 発掘調査の記録	
(1) 墳丘・周溝・墓道	5
(2) 石室	9
(3) 遺物	10
4. おわりに	11
II 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅（水ノ江・楠井）	
1. はじめに—調査の経緯と組織—	12
2. 発掘調査の記録	12
3. 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅と福智山	14
III 野添遺跡群（新原）	
1. はじめに	20
2. 位置と環境	22
3. 発掘調査の記録	
(1) 土壙墓	25
(2) 横穴墓	25
4. おわりに	39

# 図版目次

## [巻頭図版]

- (1) 福岡県指定史跡「伊方古墳」全景（北東から）
- (2) 福岡県指定史跡「方城岩屋磨崖梵字曼荼羅」および福岡県指定天然記念物「岩屋の大スギ」全景（南西から）

## [伊方古墳]

- |                            |                       |
|----------------------------|-----------------------|
| 図版 1 (1) 伊方古墳遠景 1 (南西から)   | (2) 伊方古墳遠景 2 (北東から)   |
| 図版 2 (1) 伊方古墳全景 1 (南西から)   | (2) 伊方古墳全景 2 (南東から)   |
| 図版 3 (1) 伊方古墳遠景 (東から)      | (2) 樹木伐採途中の伊方古墳 (東から) |
| (3) 樹木伐採終了後の伊方古墳 (南西から)    |                       |
| 図版 4 (1) 第 1・2 トレンチ (南西から) | (2) 第 2・3 トレンチ (西から)  |
| (3) 第 3・4 トレンチ (北西から)      |                       |

図版5 (1) 第1トレンチと墳丘断面（北東から） (2) 第4トレンチと墳丘断面（南東から）  
(3) 第5トレンチ（東から）

図版6 (1) 石室全景（入口から） (2) 前室右側壁（入口から）  
(3) 前室左側壁（入口から）

図版7 (1) 玄室左側壁（入口から） (2) 玄室左側壁の目地（入口から）  
(3) 奥壁（入口から）

図版8 (1) 前室右側壁（玄室から） (2) 前室左側壁（玄室から）  
(3) 石室全景（玄室から）

#### [方城岩屋磨崖梵字曼荼羅]

図版9 (1) 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅および岩屋大スギ全景1（南東から）  
(2) 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅および岩屋大スギ全景2（南西から）

図版10 (1) 梵字群全景（南西から） (2) 岩屋の大スギ（北西から）

図版11 曼荼羅（南から）

図版12 (1) 銘文（南から） (2) 梵字群近景（南西から）

図版13 (1) 第1・2トレンチ1（南西から） (2) 第1・2トレンチ2（南西から）  
(3) 第1トレンチ（南から）

図版14 (1) 第2トレンチ（南から） (2) 第3トレンチ調査風景（東から）  
(3) 第3トレンチ（南東から）

#### [野添遺跡群]

図版15 (1) 野添遺跡群遠景（西、彦山川から） (2) 野添遺跡群近景（東から）  
(3) 野添遺跡群全景（北から）

図版16 (1) 1号石蓋土壙墓（北から） (2) 1号石蓋土壙墓（西から）  
(3) 1号石蓋土壙墓蓋石除去後（西から）

図版17 (1) 土壙墓群近景（北から） (2) 2号土壙墓（北から）  
(3) 3号土壙墓（西から）

図版18 (1) A-1号横穴墓全景（西から） (2) A-1号横穴墓全景（東から）  
(3) 玄室閉塞状況（西から） (4) 排水溝蓋石（西から）

図版19 (1) 玄室上面敷石（西から） (2) 玄室閉塞状況（西から）  
(3) 閉塞石除去後と排水溝（西から）

図版20 (1) 大刀出土状況（南から） (2) 鉄剣・鉄鏃出土状況（北から）  
(3) 銅鈴・鉄鏃出土状況（西から）

図版21 出土遺物1（装身具、土器）

図版22 出土遺物2（武器、農工具、石製品）

# 挿 図 目 次

## [伊方古墳]

- 第1図 伊方古墳の石碑  
第2図 伊方古墳と周辺の遺跡  
(1) 伊方古墳横の石垣崩落状況 (2) 伊方小学校生徒への説明  
(3) 伊方古墳指定地内の家屋解体状況 (4) 発掘調査風景  
(5) 伊方小学校遺跡第2地点の説明板 (6) 伊方小学校遺跡第3地点の説明板  
第3図 方城町主要文化財分布図 (1/25,000)  
第4図 伊方古墳周辺地形図 (1/3,000)  
第5図 伊方古墳墳丘測量図 (1/200)  
第6図 伊方古墳墳丘断面図 (1/100)  
第7図 第1・4トレンチ墳丘断面実測図 (1/30)  
第8図 墳丘上採集須恵器実測図 (1/3)  
第9図 墳丘上採集須恵器  
第10図 伊方古墳石室実測図 (1/60)

## [方城岩屋磨崖梵字曼荼羅]

- 第11図 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅周辺地形図 (1/2,000)  
第12図 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅測量図 (1/200)  
第13図 曼荼羅・銘文・梵字 (1/20)

## [野添遺跡群]

- 第14図 野添横穴墓群分布図 (1/3,000)  
第15図 地形測量図 (1/200)  
第16図 1号石蓋土壙墓実測図 (1/30)  
第17図 2・3号土壙墓実測図 (1/30)  
第18図 A-1号横穴墓実測図 (1/60)  
第19図 A-1号横穴墓玄室内遺物出土状況実測図 (1/20)  
第20図 玉類実測図1 (1/1)  
第21図 玉類実測図2 (1/1)  
第22図 銅製品・鉄製品実測図1 (1/2 1/4)  
第23図 鉄製品実測図2 (1/2)  
第24図 鉄製品実測図3 (1/2)  
第25図 石製品実測図 (1/3)  
第26図 土器実測図 (1/3)  
第1表 管玉計測表  
第2表 ガラス丸玉計測表  
第3表 ガラス小玉計測表



方城町の位置

# I 伊方古墳

## 1. はじめに—調査の経緯と組織—

伊方古墳は福岡県田川郡方城町大字伊方字石丸3946番地に所在する、全長11.6mの3室構造の横穴式石室を有する古墳として、彦山川流域（田川地域）はもちろん、福岡県内においても屈指の大型古墳の一つである。その重要性は早くから注目されており、大正8（1919）年4月に「田川郡教育会」が建立した石室入口横の「伊方之古墳」の石碑（第1図）がそのことを物語っている。この石碑の裏面には、「由緒詳カナラザルモ古来伊方ノ古墳トシテ名アリ此ニ一基ノ標ヲ存シ以テ他日ノ考定ヲ俟ツ」と記されており、いずれこの古墳の歴史的意義が解明されることを期待する大正期の人々の想いも読み取れる。その後、この古墳は石炭産業関連の土取り等により墳丘が大きく削平され、現在では本来墳丘が存在した部分まで炭鉱住宅が建設されている。冒頭でも述べたように、古墳自体の重要性は明らかであり、またこれ以上の古墳の破壊を防ぐことからも、福岡県では昭和52（1977）年4月9日にこの伊方古墳を福岡県指定史跡とした。

このような状況の中、平成3（1992）年に赤字再建団体から脱却した方城町では、方城町の中心地に位置して町民の憩いの場となり、また近接する伊方小学校や方城中学校の教材としても活用できる「伊方古墳公園」の建設を予定した。そこでまず最初に、私有地であった伊方古墳の指定地（557.07m<sup>2</sup>）の公有地化を平成9（1997）年3月31日付けで行ない、今後の復原・整備に備えている。

ところが、公有地化直後の平成9年5月6日に、伊方古墳横の石垣が崩落し、通学路に影響を及ぼす事態が生じた（第2図1）。方城町では応急処置を迅速に施すとともに、石垣の修復を計画した。しかし、修復事業に際して地山を掘削する部分には、伊方古墳の周溝が存在する可能性が予想されたため、事前の発掘調査によって周溝の範囲を確認し、石垣の修復上掘削せざるを得ない部分の記録保存を行なうことになった。

そこでまず、平成9年6月13日から7月3日まで墳丘測量を行ない、7月28日から8月13日まで周溝の範囲確認の発掘調査を実施した。その後、この伊方古墳は福岡県指定史跡であるにも拘らず、いまだ正式な石室の実測図が公表されていないため、9月24日から10月20日までの間に石室の実測作業を実施した。伊方古墳に対する地域住民の关心は高く、5月9日には伊方小学校5・6年生の授業として、また10月20日には老人大学の講座として、それぞれ現地において説明会を行ない好評を得た（第2図2）。発掘調査および報告書作成に関する組織は以下のとおりである。

方城町教育委員会

福岡県教育庁筑豊教育事務所



第1図 伊方古墳の石碑

教育長	渡邊健司	所長	松岡 賛
社会教育課長	桑野隼人	副所長	石川元彬
係長	石谷敏行	生涯学習課長	池田 明
主査	中村月美	文化班主任	水ノ江和同（調査・報告担当）
主事	福高教晃（調査・報告担当）	主任主事	徳永昭彦

なお最後になりましたが、発掘調査中においては、地域住民の方々をはじめ、方城町文化財専門委員の高津勝春・永末宏之・植田辰生・財津政義・植田年昭の各先生に多くの御指導・御助言を賜わりましたこと、深くお礼申しあげます。

## 2. 位置と環境

方城町は田川郡の北端部に位置し、遠賀川の支流である彦山川と金辺川の合流地点にあって、東は田川市、西は赤池町、南は金田町、東北方向に福智山系を背景に香春町および北九州市小倉南区に隣接する。町域は南北に長く約7.3km、東西は最も広い所で約3.8kmで、総面積は18.38km<sup>2</sup>。標高は19mから791mにおよび、町の東北部は福智山系から派生する丘陵地帯で、南方向へ約30度の緩やかな傾斜、全般的には平坦地は少なく、起伏に富んだ地形となる。

方城町の由来は、明治維新前は小倉藩（小笠原）第二区第六小区に属し、畠村・伊方村・弁城村に分かれていたが、畠村と伊方村は明治20年土地総丈量の際に合併して伊方村と改称した。さらに、明治22年4月1日、町村制施行に際して再度合併して伊方村の「方」と弁城村の「城」の字を取り「方城村」となり、昭和31年8月1日の町政施行に際して「方城町」となり今日に至っている。

本町の基幹産業は農業であったが、昭和20年代の石炭産業の隆盛により、昭和35年頃までは農業従事者の石炭産業への流動が進展し、就業人口の約半分は第二次産業の従事者となった。平成6年度における方城町の人口は8,155人。

現在は、炭坑の町から九州日立マクセルを中心とした内陸性工業地域として、また筑豊・北九州地域のベッドタウンとして徐々に姿を変えていったが、県道22号線・田川-直方バイパスの開通を契機に、住宅開発や道路の整備がより急速に進められている。

方城町内の文化財は豊富で、福岡県指定天然記念物「定禪寺の藤」をはじめ、福岡県指定史跡の「伊方古墳」「弁城岩屋磨崖梵字曼荼羅」等があり、町民の文化財に対する意識も高い。この他にも、伊方小学校に近接する「九州日立マクセル赤煉瓦記念館」は、石炭産業の発展を象徴する代表的な近代化遺産の一つとして1905（明治37）年頃に建設されており、平成9年9月16日づけで福岡県内3番目の国の登録文化財となっている。

弥生時代の遺跡としては、石棺から内行花文鏡が出土した弁城地区の宝珠遺跡や草場遺跡をはじめ、すでに報告済みの法華屋敷遺跡や迫・野添石棺墓群等が有名である。

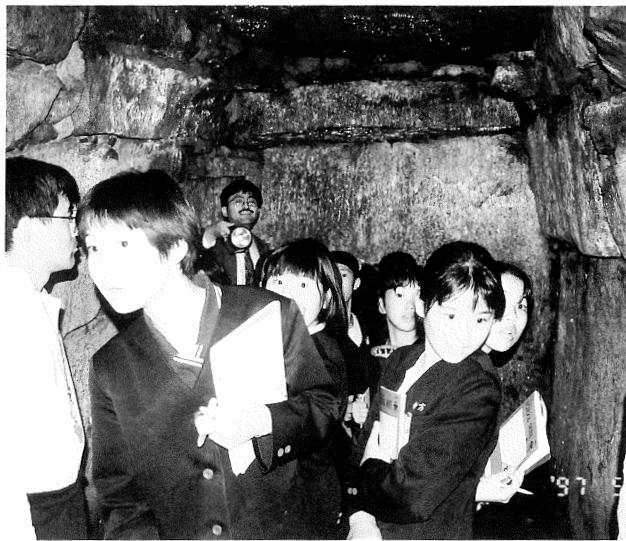
古墳時代の遺跡としては、町内に広く横穴墓が分布するが、その中でも迫横穴墓群・野添横穴墓群・山の神横穴墓群等は規模が大きい。古墳としては、迫古墳・高崎古墳・三本松古墳等があるが、中でも今回報告の県指定史跡「伊方古墳」は石室長11.6mの3室構造の横穴式石室で、田川地区最大の石室を有する古墳として注目される。

また、岩屋古窯（通称「高麗窯」もしくは「古上野唐人窯」）と呼ばれる近世上野焼の窯跡も弁城地区にあるが、発掘調査等が実施されたことはなく詳細はわかっていない。

このように、方城町では古代から近・現代に至るまで多くの文化財が豊富に存在している。特に、今回の発掘調査が実施された伊方古墳の立地する丘陵は、弥生・古墳時代を中心に中世・近世の城跡も存在し、町内でも遺跡の質・量が卓越した地区である。したがって、今後に予定された開発行為に対しては、関係各所と綿密で慎重な協議を重ね、遺跡の保存に努めることが強く望まれよう。



(1) 伊方古墳横の石垣崩落状況



(2) 伊方小学校児童への説明



(3) 伊方古墳指定地内の家屋解体状況



(4) 発掘調査風景

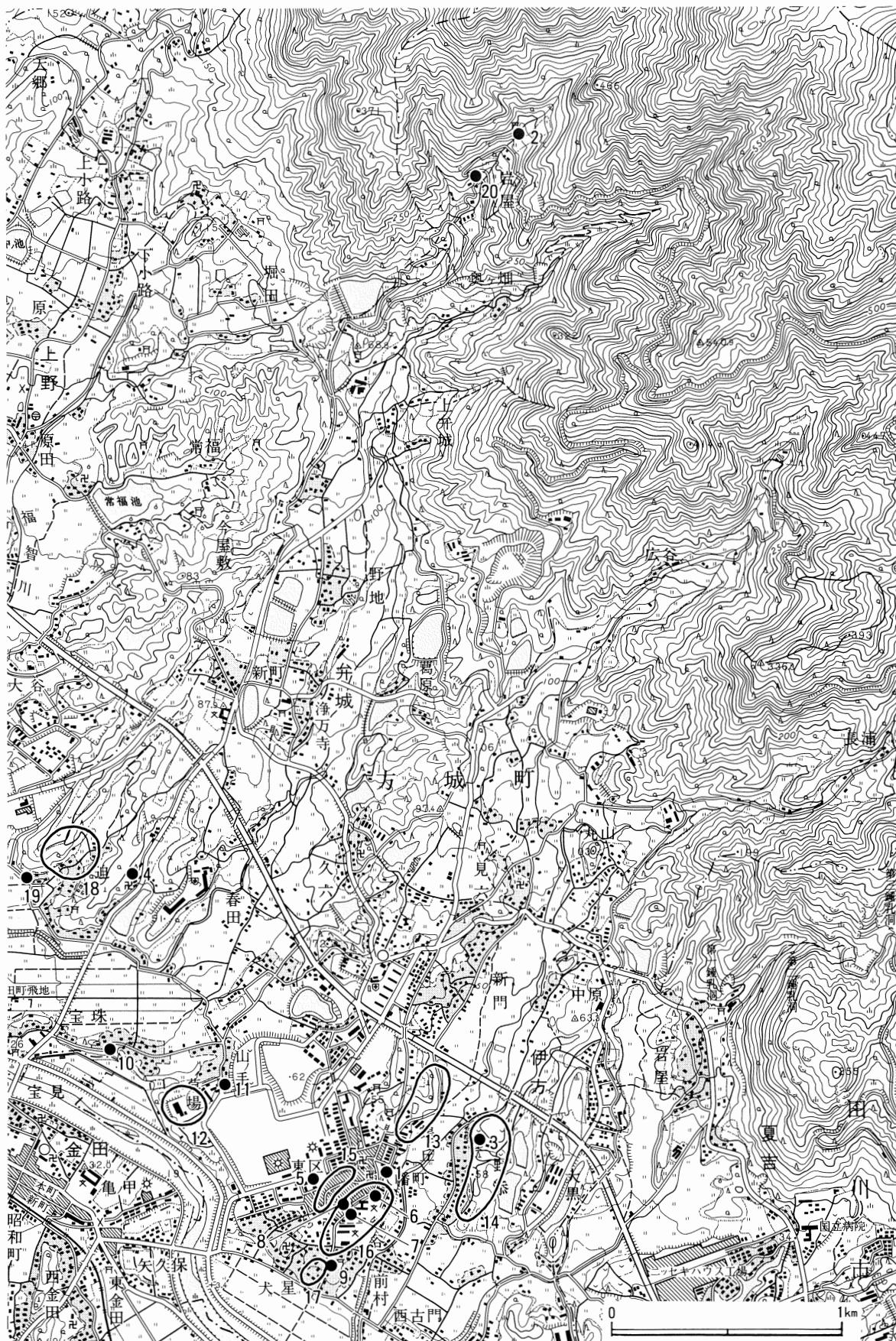


(5) 伊方小学校遺跡第2地点の説明板



(6) 伊方小学校遺跡第3地点の説明板

第2図 伊方古墳と周辺の遺跡



1. 伊方古墳(県指定史跡) 2. 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅(県指定史跡) 3. 野添遺跡群(平成2年調査) 4. 定禪寺の藤(県指定天然記念物)  
 5. 九州日立マクセル赤煉瓦記念館 6. 伊方小学校遺跡第1地点 7. 伊方小学校遺跡第2地点 8. 伊方小学校遺跡第3地点 9. 法華屋敷遺跡  
 10. 宝珠遺跡 11. 三本松古墳群(石棺墓群) 12. 草場遺跡 13. 長谷横穴墓群 14. 野添横穴墓群 15. 後谷遺跡群 16. 伊方遺跡群  
 17. 犬星遺跡群 18. 追横穴墓群 19. 追跡 20. 高麗窯跡(古上野窑跡)

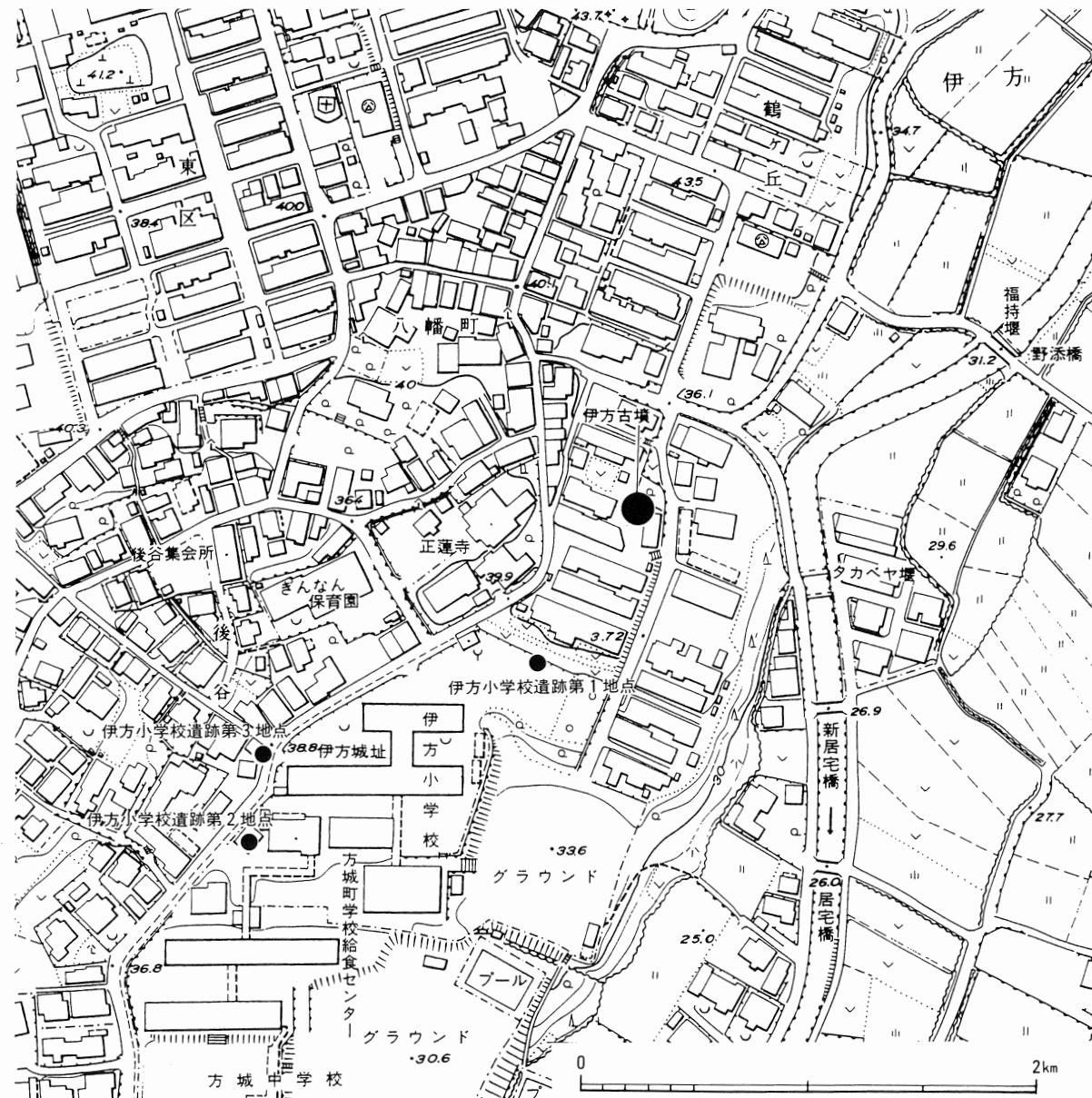
第3図 方城町主要文化財分布図 (1/25,000)

### 3. 発掘調査の記録

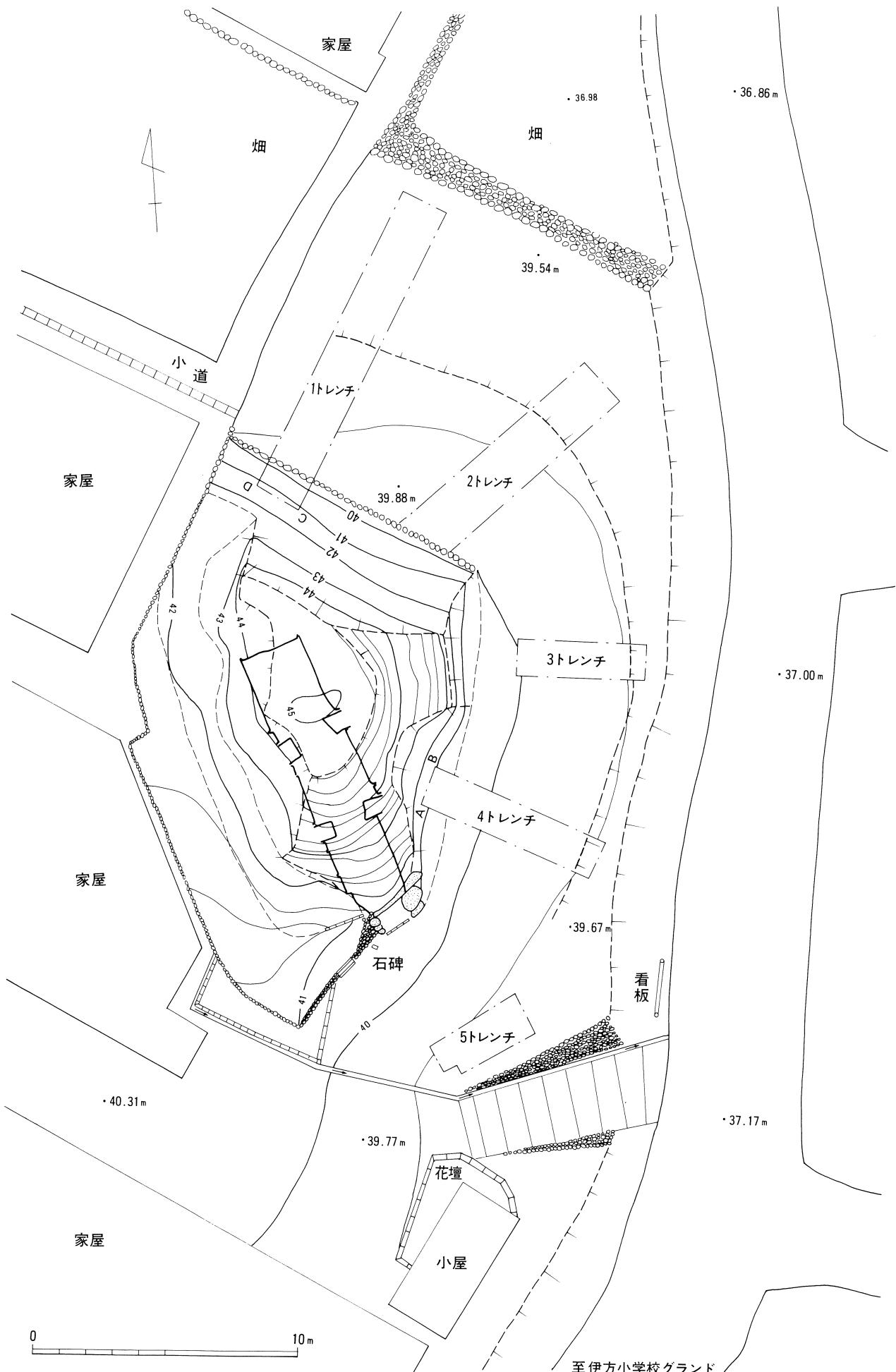
#### (1) 墳丘・周溝・墓道

伊方古墳は、福智山系から派生する舌状丘陵の先端部から約500mほど山側に上った所で、この丘陵の東端部、標高40mに立地する。彦山川とは直接的には面していないが、墳頂に登れば彦山川をはじめその流域の平野部が一望できる。現在はこの伊方古墳しか残ってなく、またかつてその他にも古墳が存在していたという言い伝えも特はないが、以前この丘陵上で埴輪片が採集・報告されていることから、他の古墳の存在も当然に予想される。しかし、伊方古墳自体もかなり墳丘が削平されていることからもわかるように、方城炭鉱の中心地であったこの一帯は古くから各種開発が盛んで、古墳等の遺存はあまり望めそうにないのが現状である。

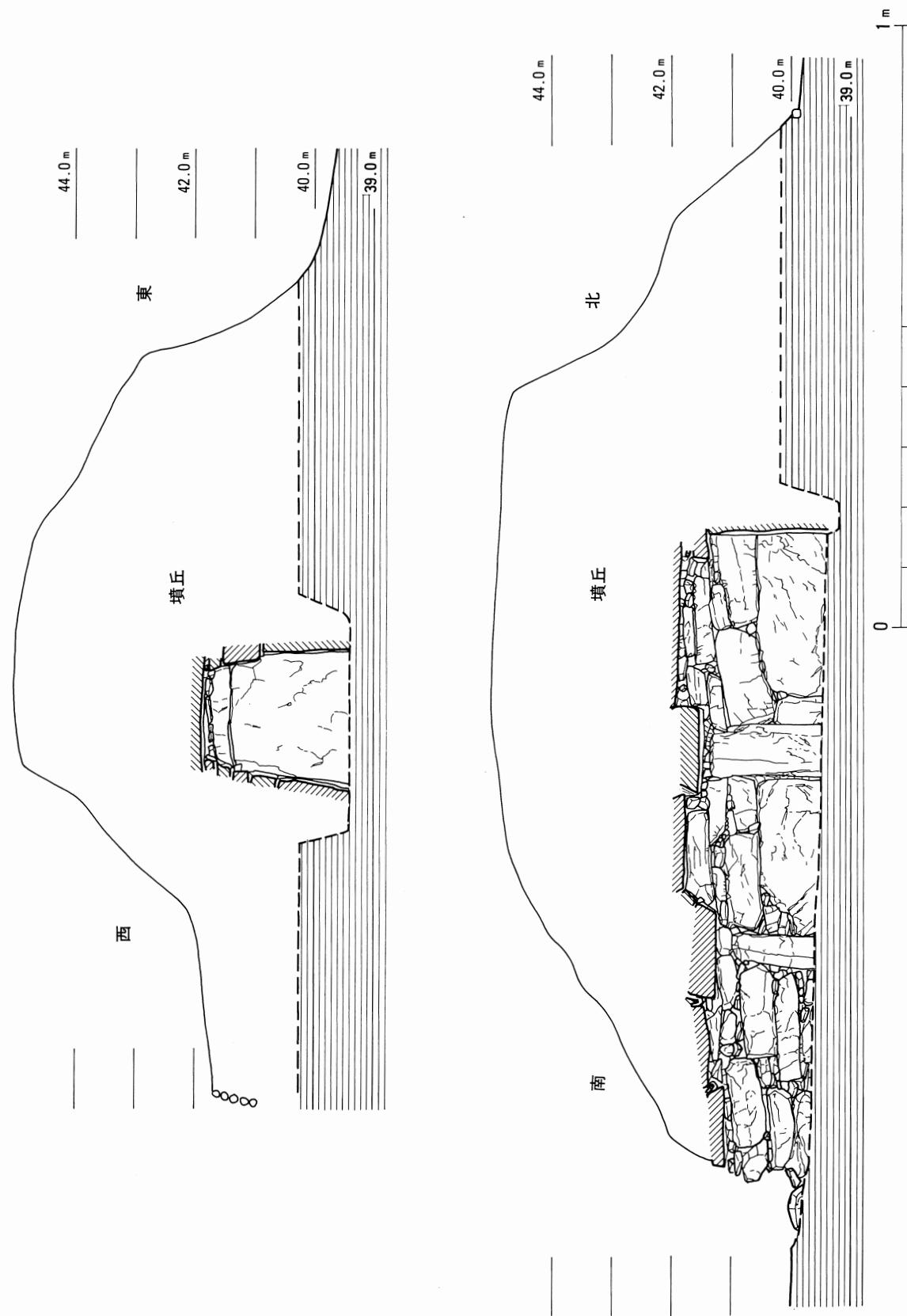
さて、福岡県指定史跡の対象となっているのは、方城町大字伊方字石丸3946番地の557.07m<sup>2</sup>であ



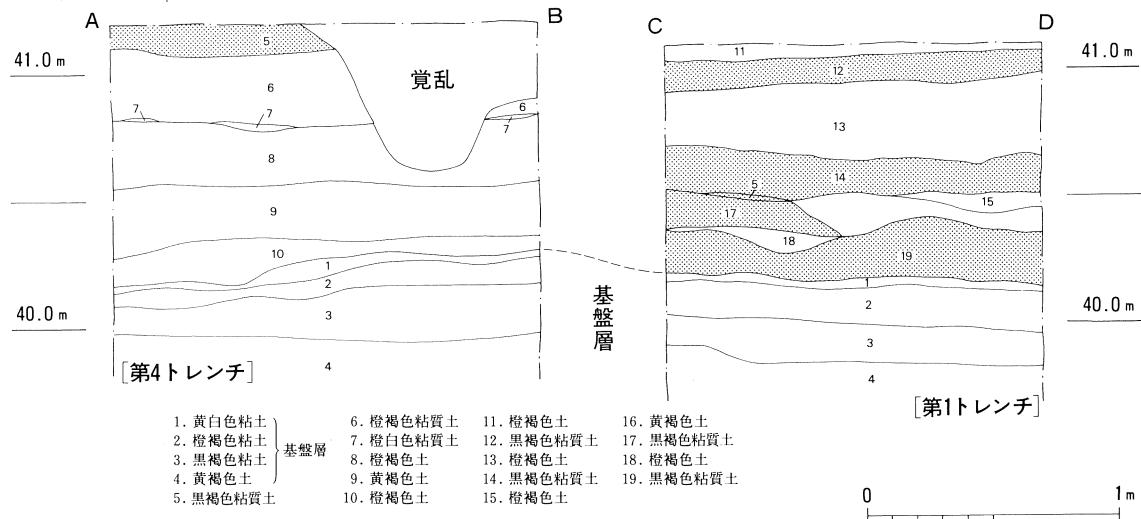
第4図 伊方古墳周辺地形図 (1/3,000)



第5図 伊方古墳墳丘測量図 (1/200)



第6図 伊方古墳墳丘断面図（1/100）



第7図 第1・4トレンチ墳丘断面実測図（1/30）

り、これは伊方古墳が完全に遺存した場合の東側約1/3に相当する。冒頭でも述べたように、今回の調査は崩落した石垣の修復に伴うもので、古墳の範囲・規模の確認を行なうとともに、石垣の修復に際して最低限必要な地山の掘削が生じる部分の記録保存を目的とするものであった。したがって、範囲・規模の確認は自ずと公有地化された指定地内に留まり、それ以外の部分（2/3）についてはいまだ家屋が存在していることから、調査の対象外となった。

#### 周溝・墓道

今回、周溝を確認するためのトレンチは、石室玄室部を中心とした放射状のラインに4本（第1～4トレンチ）設定した（第5図）。また、墓道の存在を確認するためにトレンチを、墓道に直交するように1本（第5トレンチ）設定した。しかし、いずれのトレンチにおいても後世の削平が著しく、30cm前後の表土を除去するとすぐに黄褐色の地山が表出し、古墳に関連した周溝および墓道はまったく確認されなかった。特に、第5トレンチは現地表面から1.5mほど掘り下げたが、ボタが埋められており地山まで至っていない。なお、第2トレンチではおそらく貯蔵穴になるであろう径2mほどになる円形プランの土坑が確認され、弥生土器小片の出土も見た。しかし、今回の調査目的とは直接に関係なく、また開発等による削平も予定されていないので、敢えて発掘は行なわなかった。

ところで、第1～4トレンチのいずれにおいても、墳丘とは反対のトレンチ端部で大きな落ち込みが確認された。第5図でそれらを繋いでみたが、本来の円墳という墳丘形態に対応するようにも見える。しかし、この落ち込みが古墳築造時から存在した旧地形なのか、あるいは年代の新しいものなのか年代を決める根拠はなく判然としないが、石炭産業関連による開発が著しい当該地では、比較的年代の新しい落ち込みである可能性が高いようにも思える。

#### 墳丘

現存する墳丘の規模は、南北22m、東西13mを測る。第5図に示したように、墳丘全体に亘って削平が著しく、石室はまさに首の皮一枚の盛土によって覆われている様子がわかる。それでも墳高は5.1mとかなり高く、第6図の墳丘断面図を見る限りでは、石室入口から墳頂にかけての斜面だけは築造当時の状態をかなり忠実に留めており、また墳頂の平坦面もやはり本来の姿を留めていると見ることができる。しかし、葺石は存在せず、また墳丘測量などでは段築の有無も確定できなかった。

第7図に示したように、第1・4トレンチの墳丘に接する部分においては、地山成形の状態や墳丘の構築方法を観察するため、最低限の断ち割りを実施した。第1トレンチの部分では、標高40.2mのところで地山上面の黄白色粘土が確認され、その上に黒褐色粘質土と黄褐色土が10~20cmの厚さで、版築状に交互に積み重ねられた状態が観察された。また、第4トレンチではやはり標高40.3mのところで地山が確認されたが、ここでは第1トレンチとは異なり、様々な種類の土が約20cmの厚さで重ねられていた。以上のことから、この墳丘は少なくとも50cmほどは地山を削り出した後に、4.8~4.9mの土を盛ったと推察することができよう。石室については、現在の最下面が標高39.7mであることから、少なくとも50~60cmは地山面を掘り込んで構築していることになる。

## (2) 石 室

伊方古墳の石室は、玄室・中室・前室の3室構造を形成する横穴式石室である。前室と羨道の境界には明確な袖石はなく厳密な意味での3室構造とはならないかも知れないが、前室としての天井部や、この天井部に対応する側壁には前室と羨道の境界を意識した段差が存在することから、基本的には3室構造を意識した横穴式石室と認識した。といってもこの3室という構造は、石室構築以前の明確な設計図に基づくものではなく、後述するように構築の過程で意図されたと考えられる。すなわち、結果として3室構造になったのであり、明確な3室構造の系統と位置づけるよりは、その形骸化と見ることが妥当である。石室全長は11.6m、玄室標高は39.7m、後室標高は39.8m、主軸は北に対して20°西へ傾く。かなり古くから開口していたようで、遺物はなく床面は硬く踏み締められ、框石も存在しない。石材はすべて近隣の福智山系で産出する花崗岩である（第8図）。

### 玄室

玄室の規模は中軸線上で奥壁から玄門まで3.15m、奥壁幅2.28m、玄門袖石の内側幅は2.38mで、平面プランは比較的歪みの少ない長方形になる。周壁の最下部は腰石として、奥壁・右側壁・左側壁ともに表面が平坦に打割された大きな1石を配置するが、左側壁のみ玄門袖石との間に小さな腰石が入る。奥壁の腰石は上端幅1.95m、下端幅2.19m、高さ2.00mで上部がやや内傾して立ち上がり、約40cmほど突出する高さ0.25cm、幅1.65cmの1石を経て天井部に至る。右側壁は高さ1.45mの1石の上に、2ないし3段を積み上げて天井部に至る。左側壁は玄門袖石との間に小さな腰石が入るもの、高さ1.18mのやはり大きな1石が腰石となり、その上に3段が積み上げられ天井部に至る。両側壁ともわずかに持ち送りが見られ、右側壁は35cm、左側壁は49cmを測る。石はいずれも大きなものが使用され、石と石の間には拳大の小礫を挟んだり茶褐色粘土を目地としてふんだんに詰め込む。玄門部の楣石は奥壁方向に約30cmほど突出し、その高さは奥壁の最上部の突出部と対応する。玄門の両袖石だけを見るなら左右対称になるように成形され、またそのような位置関係に設置されるが、石室の中軸線とは直交するような位置関係ではなく、西方向に8°ずれている。天井部は床面から2.46m、長軸方向に2.41m、幅1.43mを測り、大きな1石が用いられる。

### 中室

中室床面は、玄門と中門の間が2.72m、幅2.40mを測る。中門も玄門と同様に西方向に5°ずれているため、平面プランは長方形に近い平行四辺形になる。右側壁は高さ0.95cmの1石を腰石とするが、玄室の左側壁と同様に、玄門袖石との間に小さな腰石を入れる。その後3段を積み上げて天井

部に至る。左側壁は高さ1.04mの1石を腰石とし、やはり3段を経て天井部に至る。ここでも、石と石の間には拳大の小礫を挟んだり茶褐色粘土を目地としてふんだんに詰め込む状況が見られる。持ち送りは玄室よりも著しく、右側壁が52cm、左側壁が58cmを測る。中門の両袖石の上部には、楣石の高さを玄門の袖石の高さに合わせるために、幅は袖石と同じで高さが20~30cmの人頭大の石をそれぞれ1つのせてバランスをとる。また、中門の楣石と天井部との間には1石が入るが、本石室の中にあってはこの楣石から天井部までに至る部分だけが面を揃えて斜めに立ち上がっている。天井部は玄室同様に1石で構築され、床面からの高さは2.26m、長軸方向に1.48m、幅1.38mを測る。

### 前室

先述したように、前室と羨道を明確に区分する前門ともいえる袖石が存在しないため、前室を認定した3室構造横穴式石室とすることに若干の躊躇を覚えるところである。しかし、天井部は明確に構築され、また天井部と羨道の境界に相当する右側壁部腰石には石を削りだして屈曲部を作出したり、左側壁部腰石には石を突出させ段差を付けたりすることで、羨道との境界を意図的に表出している。したがって、3室構造という認識に至った。長軸方向には2.12m、幅2.15mを測り、平面プランはほぼ正方形になる。といっても、中門は先述したように中軸線とは必ずしも直交しないため、完全な正方形にはならない。前室には大きな1石を用いた明瞭な腰石はなく、全体に大き目の石が比較的粗く積み上げられ、右側壁は4段を、左側壁は5段を数える。天井部は床面から1.84mを、長軸方向に1.42m、幅1.15mを測り、やはり1石が用いられる。

### 羨道

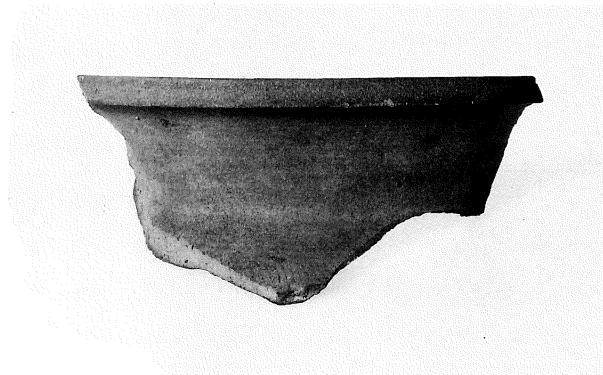
羨道部は土砂に埋もれている部分が多く、また入口部は左側壁のように石が抜かれたり、右側壁については入口部の石が残っていても原位置を留めていなかったりして、本来の状態は不明の部分が多い。腰石から判断する限りでは、後室との境界から入口までの長さは2.17m、後室との境界部の幅は1.88m、入口部の幅は1.21mを測り、入口へ向けて狭くなる。両側壁とも3段の石の積み重ねを経て、高さ1.51mの1石の天井部に至るが、これより入口側にまだ天井部が続くのか、それともこの1石で終わるのかは判然としない。この入口近くまで、石と石の間には拳大の小礫を挟んだり茶褐色粘土を目地としてふんだんに詰め込む状態が、比較的良好く残っている。

### (3) 遺物

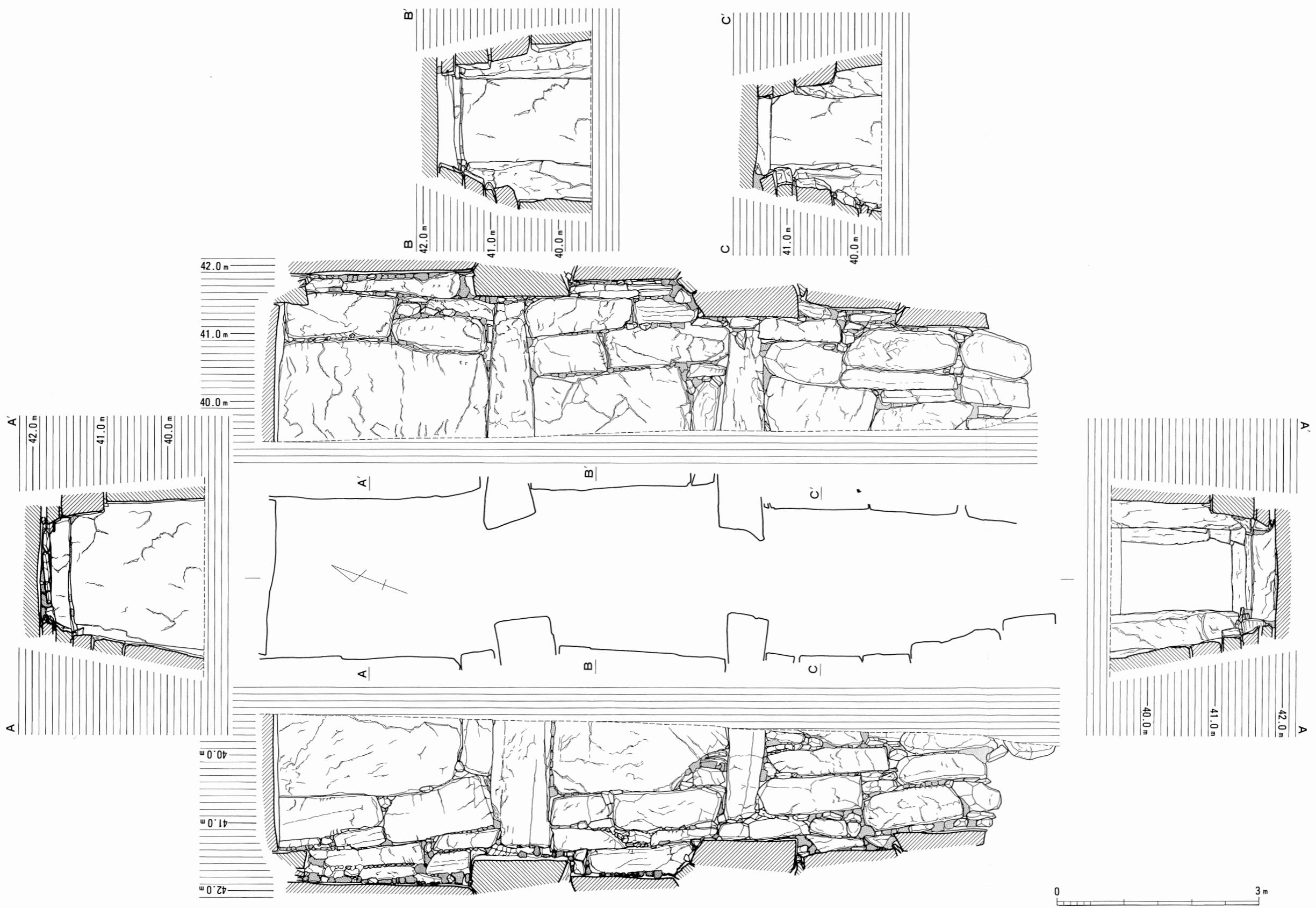
石室はかなり古くから開口していたようで、石室内から出土した遺物は現在に伝えられていない。周溝や墓道も遺存せず、トレンチの



第8図 墳丘上採集須恵器実測図（1/3）



第9図 墳丘上採集須恵器



第10図 伊方古墳石室実測図 (1 / 60)

排土からも弥生土器の小片がわずかに認められるだけで、古墳時代の遺物はまったく認められない。このような状況の中、墳丘上の雑木の伐採に際して、石室入口から墳頂にかけての斜面途中（標高43.25m付近）で、第8・9図の須恵器甕口縁部から頸部にかけての破片を採集した。遺存率は全体の1/3程度で、復原口径20cm、復原頸部径14cm。口縁部から頸部にかけては、ヨコナデが施される。頸部から胴部にかけては、外面には平行タタキの後にカキ目が施され、内面は青花波の当て具圧痕がナデ消されている。全体に焼成は良好で、淡灰色を呈する。この須恵器の年代の特定は難しいが、少なくとも6世紀後半以降に位置づけられよう。

#### 4. おわりに

今回の調査は、指定地内の石垣が鉱害によって崩落し、その修復に伴う緊急調査であったが、福岡県指定史跡であるにもかかわらず墳丘の測量図や石室の実測図が正式に公表されていなかったため、古墳の構造や規模を判断する最低限の調査と資料の提示まで行なった。その結果、全長11.6mの3室構造の横穴式石室を有し、周溝や墓道は確認されなかったが、墳高が5.1mを測ることから、おそらくは径約30mほどで2段築成の円墳であったということが判明した。ただし、葺石や埴輪は確認されてなく、また古くから石室が開口していたためか出土遺物についても不明である。

以上のことから、伊方古墳が彦山川流域（田川地域）においても屈指の大型古墳であり、古墳時代後期の盟主的首長墓であったことは推察に難しくはない。当該地では、4世紀代の割竹形木棺墓を主体部とする経塚3号墳（田川市）、主体部の箱式石棺墓から内行花文鏡を出土した全長81m程度の前方後円墳である伊登古墳（田川市）、径37mの墳丘に2重の周溝を巡らし竪穴系横口式石室の名残とされる石室から多量の遺物を出土した6世紀前葉の福岡県指定史跡セスドノ古墳（田川市）、このセスドノ古墳に近接してほぼ同様の規模と石室構造を有する猫迫古墳（田川市）、横穴を主体部にしていたと考えられる全長30mの前方後円墳である6世紀後半代の狐塚古墳（大任町）等、いくつかの首長墓の存在は確認されている。しかし、これらの古墳だけではどのような首長墓の系列が辿れるのかを追及するには不十分であり、また当該地全体を総括的に統括したのか、あるいは現在の田川市付近を境界に上田川と下田川とで2地域に分かれた統括されたのかという問題も判然としない。当該地では古墳の調査例が少ないだけではなく、石炭産業関連の各種開発によって多くの古墳が破壊・消滅していると考えられるだけに、古墳時代の問題を探ることは簡単ではない。

伊方古墳の性格づけも以上のような理由から簡単ではないが、方城町という地理的な位置から田川地域全体を統括した首長の墓というよりも、現在「下田川」と呼ばれる香春町・金田町・糸田町・方城町・赤池町一帯、すなわち田川地域の中でもその北側で彦山川の下流域一帯を統括した首長の墓と位置づけたほうが妥当と考えられる。年代的には唯一の須恵器甕の破片や埴輪の出土が認められないことなどから、6世紀後半以降でも7世紀前後が想定され、当該地最後の大型古墳と言うことができよう。

今回の調査は、伊方古墳の1/3程度しか含まれない福岡県史跡指定地内しか対象にできなかった。その中では周溝や墓道は遺存していなかったため、古墳の全体的な規模の復原までには至っていない。しかし、史跡指定地外にまだ伊方古墳の2/3程度が広がっており、今後指定地の拡大を目指し、またそれに付随して周溝の確認調査を実施して、伊方古墳の本来の姿への復原・整備を含めた「伊方古墳公園」の建設を進め、地域住民への公開・活用が望まれるところである。

## II 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅

### 1. はじめに—調査の経緯と組織—

方城岩屋磨崖梵字曼荼羅は福岡県田川郡方城町大字弁城165番地の2に所在する。福智山系の麓、彦山川の支流で福智山系から派生する岩屋川右岸に広がる標高280～300mの断崖に、建武2（1335）年の紀年銘のある曼荼羅が彫り込まれ、その周囲に2ないし3カ所の梵字の彫り込みが認められる。天然の岩盤に彫り込まれた紀年銘を有する曼荼羅としては県内最古のものであり、昭和46（1971）年11月16日づけで福岡県指定史跡になっている。この岩屋川のすぐ上流には坊跡と考えられる石垣群が存在しており、また英彦山への峰入りのルート上にも相当することから、修験地として重要な役割を果たしていたことが推察される。また、年代は異なるが、指定地内には樹齢400年程度とされる福岡県指定天然記念物「岩屋の大スギ」（平成9年7月25日指定）があり、下流約200mには古上野焼窯跡とされる通称「高麗窯跡」も存在する（第11図）。

さて、方城岩屋磨崖梵字曼荼羅は県指定当時まではかなり良好な遺存状態であったことが当時の写真からも窺える（図版12・13）。しかし、昭和48年の大雨による鉄砲水により、それまでは曼荼羅から約6～7mほど離れていた岩屋川の流路が大きく変わり、曼荼羅から1～3mのところまで近接するようになった。したがって、曼荼羅周辺には著しい湿気とコケの繁茂から岩盤の風化が急激に進み、また大雨の増水に際しては曼荼羅下の紀年銘最下部が水に浸かり、侵食もやはり急激に進んだ状態になっている。

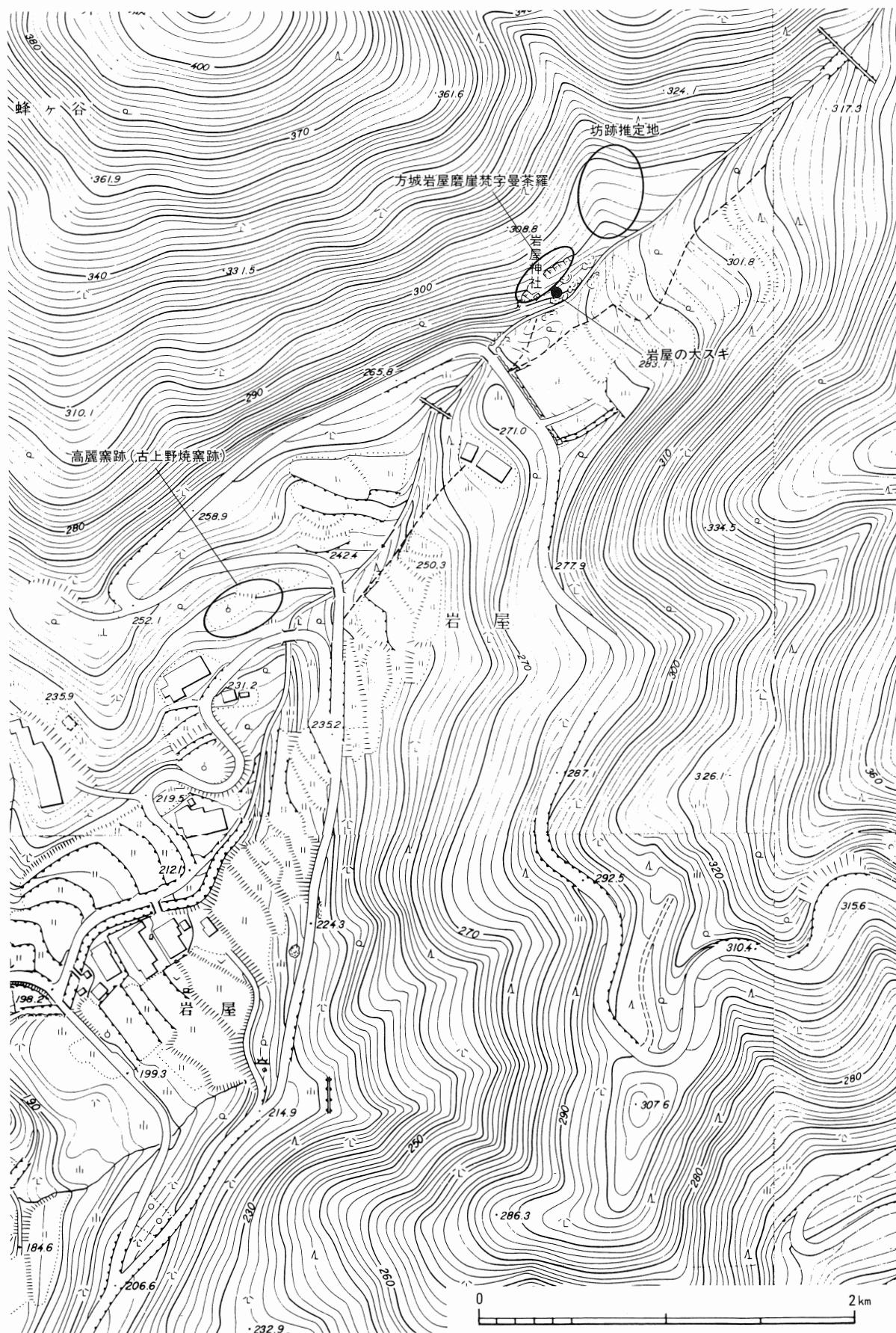
このような状況の中、方城町では方城岩屋磨崖梵字曼荼羅一帯を住民の憩いの場としての公園化計画が持ち上がり、平成10年度から3カ年に亘り自治省の「ふるさとづくり事業」として整備事業を実施することになった。そしてその中で、岩屋川の流路を本来の位置に戻し、方城岩屋磨崖梵字曼荼羅および岩屋の大スギを含めた保護事業も取り込むことにもなった。

そこで、曼荼羅や梵字の存在以外にその実態が知られていなかった方城岩屋磨崖梵字曼荼羅の範囲確認や関連施設の確認が整備事業に先だって必要になったため、平成9年11月11日～17日まで発掘調査を実施した。発掘調査および報告書作成に関する組織は、本書に同時掲載した伊方古墳とまったく同じであり、紙数の都合上割愛した。伊方古墳の項を参照されたい。

### 2. 発掘調査の記録

先述したように、方城岩屋磨崖梵字曼荼羅の発掘調査は平成9年11月11日～17日まで実施した。調査の目的は、曼荼羅や梵字を覆う等の関連施設（建物）が存在したのか、あるいはこの場所でどのような修験活動が行なわれ、またそれが存続した期間を出土遺物等から判断・推察するものであった。そこで、曼荼羅に近接してなおかつ岩盤に接した場所に4×1mの第1トレンチを、4文字からなる梵字群の直下でやはり岩盤に接した場所に3×1mの第2トレンチを、そしてこの地区でも最も南側で1段高い位置に建設された祠の横でやはり岩盤に接する2×1.5mの第3トレンチを設定した。

第1トレンチでは湧水が著しく、40～50cm掘り下げた時点で岩屋川の大水による砂礫層に達した。



第11図 方城岩屋磨崖梵字曼茶羅周辺地形図（1/2,000）

その過程ではトタン板や鉄筋が出土し、ごく最近に土砂が入れられた状況が確認された。第2トレントチでもやはり湧水が著しく、50~60cm掘り下げた時点で落盤層に達したため、これ以上の掘り下げを断念せざるを得なかった。ここでも鉄筋が出土しており、ごく最近に土砂が入れられたものと考えられる。第3トレントチでは表土を除去した時点ですぐに落盤層に達したため、やはり掘り下げを中止した。出土遺物はまったくない。このようにいずれのトレントチにおいても、方城岩屋磨崖梵字曼荼羅に関する遺構や遺物の出土がないだけではなく、かなり新しい時代に人間の手が加えられて現在のような平坦地が意図的に作られた状況が判明した。落盤層の下がどのような状況になっているのか興味の持たれるところではあるが、この一帯の整備事業については落盤層以下の地山の掘削を行なわないことになっているので、この部分については後日必要に応じて学術的な調査の実施を期待したい。

### 3. 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅と福智山

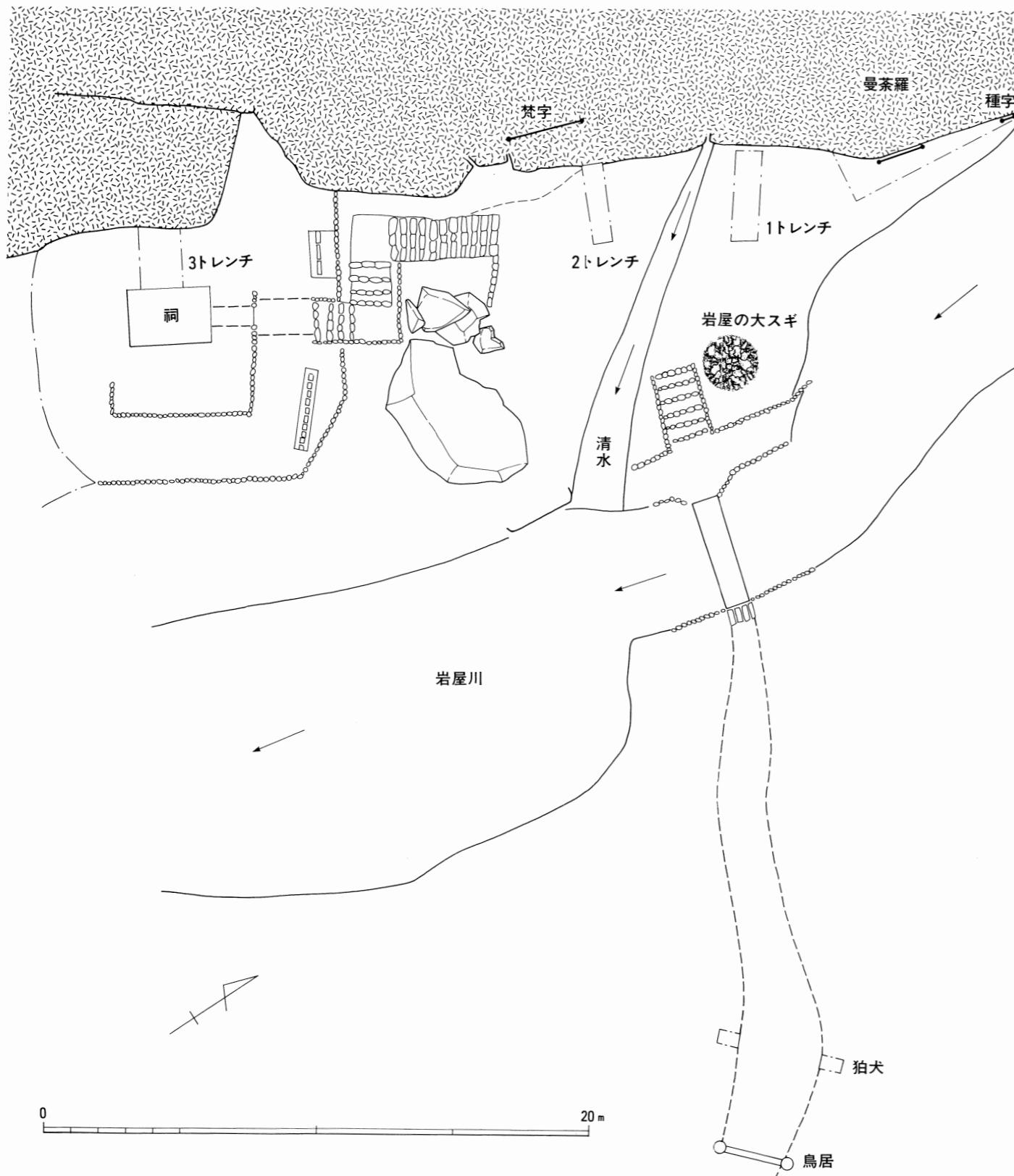
#### (1) 今日のすがた

最初に、今日の眼でみたすがたを記述しておきたい。方城岩屋磨崖梵字曼荼羅は、現在金網で柵の設置されている曼荼羅と銘文（第13図1）を中心に、その左（南）13m、現地表面から3.2m上の崖面に4文字の種字（第13図2）が、右（北）3.3mには1文字の種字（第13図3）が刻まれている。また、現在では極めて不明瞭なため断定はできないが、曼荼羅の右（北）6mにも1文字の種字が刻まれているようである。

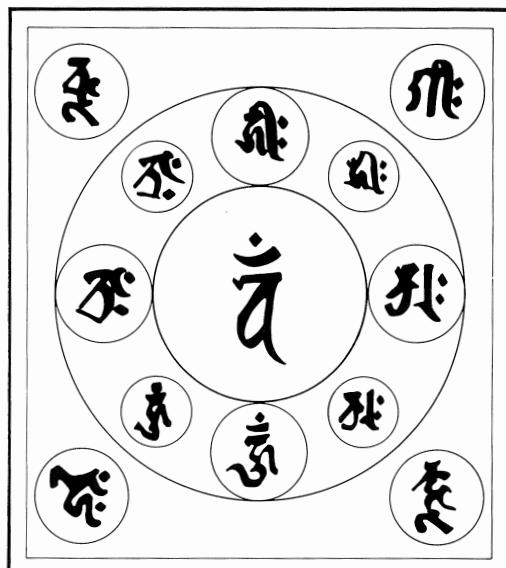
この史跡の中心的な存在である曼荼羅は、二重方形の区画のなかに刻まれた、梵字（種字）による四印会曼荼羅である。区画は外側で154×133cm、内側で143×125cmを測り、その区画外中央下には、幅約71cmに亘る6行の陰刻銘文がある（銘文下方にも横線があり、当初は銘文を囲む区画線もあったと思われる）。曼荼羅の中央には、径57cmの円と金剛界大日如来の種字を刻む。その外側に、中央円と中心を同じくする径120cmの外円を刻み、上下左右の方向に、中央円と外円に接する径28cmの円を配置し、円内に、上から時計廻りに、金剛法菩薩、金剛業菩薩、金剛薩埵、金剛宝菩薩の各種字を刻む。また、それぞれの円の間に、径16cmの小円4つをおき、円内に、金剛法菩薩と金剛業菩薩の間から時計廻りに、法波羅蜜菩薩、羯磨波羅蜜菩薩、金剛波羅蜜菩薩、宝波羅蜜菩薩の各種字を刻む。さらに、区画内4隅にも径24cmの円を配置し、円内に右上から時計廻りに金剛歌菩薩、金剛舞菩薩、金剛嬉戯菩薩、金剛鬘菩薩の各種字を刻む。なお、左（南）13mのものは、右から不動明王、阿弥陀如来、金剛界大日如来、普賢菩薩の各種子、右（北）3.3mのものは、径37cmの円と胎藏界大日如来の種字である。

#### (2) 福智山のかたち

北部九州の古代及び中世文化の形成と継承について考えるとき、山はつねに重要な役割を果たしてきた。たとえば、筑前大宰府の宝満山や豊前の彦山と求菩提山、そして豊後国東の六郷山などの歴史と造形の豊かさは、それを確かにいまに伝えている。筑前と豊前両国にまたがる福智山もまた、



第12図 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅測量図 (1/200)



1

建  
二  
潤  
月  
十三  
日  
薩  
陥  
茶  
羅  
一  
院  
門  
田  
三  
軀  
院  
大  
日  
金  
剛  
因  
十  
□  
□  
□  
敬  
白  
大願  
主法  
楷良蜜

1  
2  
3

0 1m



3

第13図 曼荼羅・銘文・梵字（1 / 20）

筑前側山麓から出土した紀年銘をともなう銅製経筒や山里に散在する梵字板碑の質と量からうかがうに、前述の山々と同様、北部九州における文化的役割の一端を果たしていたと推測されるが、いまではほとんど無形に近い。

福智山で形成された文化が有形となったものは数少ない。そのひとつが、方城岩屋磨崖梵字曼荼羅である。昭和46年11月16日付けで福岡県史跡第33号として指定されているが<sup>(1)</sup>、この全国でも類例の少ない磨崖の四印会曼荼羅の存在と重要性が広く一般に知られるようになったのは、指定に先立つ昭和38年に発表された村島邦俊氏の「上弁城岩屋権現社磨崖梵字曼荼羅」と題する論考<sup>(2)</sup>によるところが大きい。氏は、梵字曼荼羅の形状と図像についての的確な説明とその下方にある陰刻銘文についての解釈をおこない、この磨崖梵字曼荼羅を福智山修験の歴史のなかに位置づけて研究することの必要性を説かれたが、遺憾ながら、後続が続かなかった。

方城岩屋磨崖梵字曼荼羅として刻まれる史実が福智山仏教文化の史実でもあることは、地理的環境からして容易に想像がつく。しかし残念なことに、その史実を文字情報として語る銘文は、大雨ごとの増水により摩滅が著しく進行し、現状では銘文の下方2文字分付近や元号及び干支等が解読し難い状態にある。現在判読できる内容は次のとおりである（□は現在判読不能な文字、□で囲んだ文字は現在は判読不能であるが、指定申請時に撮影された写真から判読可能な文字を表す）。

大願主法楷良蜜

因十□□□敬白

金野圓大曼茶羅

三輪院大日金野

薩陀羅茶一院門

建二〇〇潤十月十三日

(  
元  
)

すなわち、方城岩屋磨崖梵字曼茶羅の史実とは、第一に彫造年が銘文中に記されていること、第二に願主が良蜜という僧であること、そして第三にこの地に方城岩屋磨崖梵字曼茶羅が在ることである。とくに、第三の史実は福智山のかたちを語るものもある。この三つの史実を手がかりとして、福智山仏教文化の一端に迫ってみたいと思う。

### (3) 史 実

まず、第一の史実である銘文最終行の年号について考えてみたい。前述の村島氏論考では建武2年（1335）とし、県史跡指定時においても同年と解釈している。現状では、年号部分は摩滅により明かでないが、「二」と「潤十月十三日」が判読できる状態にある。「二」の次の文字は、「年」もしくは「季」、あるいは干支の第1字と思われるが、いずれにしても〔元号〕2年をさしていることには変わりない。〔元号〕2年で閏月の10月を有する年は、

(年号)	(西暦)	(干支)	(年号)	(西暦)	(干支)
貞觀2年	860	庚辰	天延2年	974	甲戌
寛治2年	1088	戊辰	嘉承2年	1107	丁亥
長寛2年	1164	甲申	寿永2年	1183	癸卯
建仁2年	1202	壬戌	正応2年	1289	己丑
建武2年	1335	乙亥	文中2年	1375	癸丑
応仁2年	1468	戊子			

以上の11年を数えるのみである<sup>(3)</sup>。これを考慮しつつ、元号の頭字を現在確認できる形から類推するとすれば、「建」の字を冠する「建仁二年（1202）」か「建武二年（1335）」である可能性が考えられる。また、「二」の次の文字を「年」もしくは「季」と読むとすれば、それに続く文字は干支のうちの1文字、あるいは横に干支2文字を並べていると思われる。仮に後者だとすれば、現在確認できる形から類推して「乙亥」である可能性が最も高い。つまり、銘文最終行については「建武二年乙亥潤十月十三日」と刻まれている可能性が高くなるのだが、元号第2字を「武」と読むにはやや難点がある。

### (4) 伝 承

第二の史実は、大願主「良蜜」である。その存在については確かに史実といえるが、伝承でもある。村島氏は、銘文中的良蜜とは別人であるとしながらも、12世紀末から13世紀初頭にかけて福智山と関わった「良密」という人物について、二つの資料を紹介している。一つは、直方市大字頓野に鎮座する鳥野神社の所蔵とされる祈願文で、「三部大阿闍梨金剛院良密法印」の名と文治元年

(1185) の年号がみえるものであり<sup>(4)</sup>、もう一つは、赤池町上野に所在するという石碑で、福智山の開山とされる教順の名とともに「廿三世中興金剛院良密大法印」とみえるものである<sup>(5)</sup>。後者には、この人物が建久2年(1191)に退隠し、建永元年(1206)に入寂した旨も併記される。これら二つの資料にみえる「良密」は、村島氏も述べているとおり、同一人物とみてよいと思われる。12世紀末から13世紀初頭にかけての時期に福智山と関係したこの「良密」について、今回新たに二・三の伝承を得たので紹介しておきたい。

一つは、『豊鐘善鳴録』である。『太宰管内志』の福地神社の項は、福智山の開山とされる教順の伝を『豊鐘善鳴録』5巻から引用する<sup>(6)</sup>。

「〔豊鐘善鳴録五巻〕に釋教順、豊前州田河郡上野莊人也（中略）、晚愛東南洞壑深秀、爲逸老之所、乃勸請福地權現、後人因地名岩窟權現、又手彫大悲石像安置焉、養老癸亥入定于窟之西塙とあり」

これによると、教順は晩年福智山東南の洞壑を愛して福智權現を勧請し、養老7年岩窟の西の塙にて入寂したという。また、この地は後に岩窟權現と号されたともいう。同様に、『直方市史』も<sup>(7)</sup>、同じく『豊鐘善鳴録』から教順伝を釈文で引用するが、入寂の後も文はさらに続き、

「後建永の初に迄を、法頭良密復た此に隠る。二年潤十日金剛界大曼荼羅を彫刻す。

苦修教順が時に追比す。」

とある。これら『豊鐘善鳴録』の内容は、まさに方城岩屋磨崖梵字曼荼羅を指すものと思われ、この地が教順入寂の地であること、そして建永2年(1207)に良密が曼荼羅を彫刻したことなど、興味深い情報を提供している。

二つ目は、宝暦4年(1754)成立の『福智山權現祠記』である<sup>(8)</sup>。これは福智權現出現以来の歴史を述べたものであるが、ここにも教順及び良密の伝がみえる。

「（前略）順行道庶幾五十年、晚廬山南補陀洞、而為終焉之計俗曰梵字石窟、乃祠祭福智權現、後人因地更石窟權現、順又手彫大悲之石像、以安焉、養老七癸亥年二月五日、入定洞窟之西塙、（中略）治承中法橋良密講台門之學、嘗稱中興、乃新祠殿、尤終東南潤、蓋順之旧趾金剛院也、建久二年遺刻今猶在矣、其六坊之名獨圓印坊（後略）」

教順伝については『豊鐘善鳴録』所収のものとほぼ同内容であるが、良密が教順旧蹟金剛院の地で生涯を終えたこと、そこに建久2年(1191)の遺刻があり、坊名を独圓印坊と称したことなどが新たに知られる。

三つ目は、幕末から明治初年頃にかけて成立したと思われる『福智山年表及法頭歴代系譜』である<sup>(9)</sup>。ここでも福智山23代として良密の名がみえる。

「廿三代良密法師、通台密之学、勤苦絕倫、建久二年重新東南 潤石窟、架屋構房退居、号金剛院、建講堂、新社、立房舎、葛木谷、岩屋床下谷、各々立房舎」

これによると、良密の代にこの地に講堂や社が建てられたほか、葛木谷と岩屋床下谷にそれぞれ僧房が建てられたことが知られる。これらの谷が現在どの場所をさすのかは定かでないが、確かに、この梵字曼荼羅の前を流れる渓流沿いに上流へ登ること20~30mの所の左斜面に石垣群が遺っている。今後の発掘調査等を待ちたいが、『福智山年表及法頭歴代系譜』にみえる房舎の跡である可能性は高いと思われる。

以上がこのたび新たに確認した「良密」に関する伝承である。村島氏が紹介し、銘文中の「良

蜜」とは別人であろうと推測された二つの「良密」資料は、結局、この方城岩屋磨崖梵字曼荼羅と結びつくものであることが判明した。また、ここで新たに確認した伝承は最も古いもので18世紀半ばに福智山で成立したものであり、少なくとも、18世紀半ば当時福智山を維持していた人々の眼に、磨崖梵字曼荼羅の銘文の年号が建久2年（1191）と映っていたことは事実とみてよい。ただ、同年に閏10月は存在しない。今日の眼からみて、銘文中の年号は建武2年（1335）である可能性が最も考えられることは前節で述べたが、伝承の眼からみたこの約150年の開きはどのように理解すればよいのか。それは今後の課題として残る。

## (5) 維 持

ところで、前節で取り上げた『豊鐘善鳴録』は、豊後国玖珠郡森城下安楽寺住の密雲（俗名河野彦契）の著述になるもので、寛保2年（1742）の自序がある。全10巻で、第5巻までは豊前・豊後に関係のある僧侶の伝記を集めている。現在公刊されているものに2種あるが、なぜかそのいずれにも教順伝は収められていない<sup>10</sup>。では、19世紀半ば成立の『太宰管内志』や『筑前国続風土記拾遺』に引用される『豊鐘善鳴録』教順伝をいったいどのように考えればよいのであろうか。

この点について、かつて福地山の学頭坊であった福泉坊（田川郡赤池町大字上野）所蔵の『福智山年表及法頭歴代系譜』（幕末から明治初年頃にかけて成立）に興味深い記事がみえる。宝暦年中（1751～63）に福智山学頭位にあった43代宥応が、同山開祖教順伝を『豊鐘善鳴録』に添入し、旧記を蠹壊し改正したというものである<sup>11</sup>。この宥応は、宝暦3年（1753）、福智山山上の筑前国側に石祠（現在の福智山上宮）を再建、祭祀を始めるなど、同山の復興整備に奔走した人物である。彼の尽力により、福智山はふたたび隆盛を迎えたらしい。宝暦四年に前住の42代宥海が福智山の歴史と靈験を卷子本『福智山権現祠記』にまとめたり、宥応が開祖教順伝の『豊鐘善鳴録』添入を図ったりしたのも、福智山を維持する僧侶にとって、信すべき信仰上の真実を守り、その復興を図るための必要不可欠な行動であった。その努力が実り、『豊鐘善鳴録』の改正版が筑前国内に流布することになったのであろう。

## (6) 持 続

小稿では、方城岩屋磨崖梵字曼荼羅の銘文と周辺資料から福智山における宗教活動の一端を明らかにすることを試みた。前者は史実であり、後者は伝承である。その伝承から、この地に「独円印坊」ないし「金剛院」と称される僧坊が置かれ、さらにそれが講堂をともなう大規模なものであったことなどを知ることとなった。

伝承の語ることは、虚譚を交え、貧しく乏しいものであるかもしれない。しかし、事実が語られていないわけではないと思う。事実とは、史実の意味もあるが、福智山を維持してきた人々にとっての信すべき信仰上の真実であり、そのことは尊重されるべきであろう。なぜなら、かえってこちらの方が数世代前の方城岩屋磨崖梵字曼荼羅のありさまを正しく伝えているようにさえ思われるからである。本来、我々もその伝承者であるべきなのである。方城岩屋磨崖梵字曼荼羅をいま在らしめているものは、いったい何であるのか。この問い合わせが、方城岩屋磨崖梵字曼荼羅の史実、すな

わち福智山のかたちを語り伝えてゆくことであり、方城岩屋磨崖梵字曼荼羅の持続にもつながってゆくであろう。

[註]

- (1) 福岡県教育委員会『文化財台帳』指定事由「岩屋の磨崖梵字曼陀羅は、上野川の渓流に臨み、岩屋社の境内、岩壁のほぼ中央部上方に、普賢・大日・阿弥陀・不動の四種子を並列し、下方には金剛界四印会曼荼羅と、胎藏界大日の種子を左右対称の位置に刻んでいる。いずれも薬研彫りの手法によっており、書体も同一である。又その銘文から法橋の良蜜が願主となり、建武二（1335）年に完成したことが知られ、全国でも珍しい四印会曼荼羅であること、彫造年代が明かである点において重要である。梵字曼荼羅の場所は、福智山の登山道にあたり、清流にあらわれているこの辺が、かつては修驗道の行場であったことも考えられる。保存も良好であり、その重要度からみて、県指定史跡として十分価値あるものと考える。」（原文のまま）
- (2) 村島邦俊氏「上弁城岩屋権現社磨崖梵字曼荼羅」（『直方郷土研究会々報』第3号 昭和38年6月）
- (3) 『日本史小百科 曆』（広瀬秀雄著 東京堂出版 昭和53年3月）
- (4) 『鞍手郡誌』第十四章 神社 鳥野神社の項「天下泰平国土豊饒朝上無異宝祚延久 大樹尊君保国安民福延万世 当国大守公御武運永輝御国家安泰山上社頭繁栄神徳倍増寺院安静正法興隆産子繁昌農業隆盛風調雨潤百穀成就 修法竟神體奉納石窟密法作法者前後遠見付人不知様奉納此一軸者深秘筐底禁他見代々令附与者也 三部大阿闍梨金剛院良密法印謹記于時文治元乙巳年孟春吉辰」
- (5) 村島氏前掲論考(2)

「 養老七癸亥年二月五日寂  
福智開山金光明院教順大法師靈碑  
廿三世中興金剛院良密大法印靈碑  
建久二年退隠建永元丙寅年  
二月七日寂 」
- (6) 『太宰管内志』〔伊藤常足編 豊前志：天保12年（1841）叙有り〕 豊前国三巻 田川郡下 福地神社の項。そのほか、『筑前国続風土記拾遺』〔青柳種信他編 文久年間（1861～64）完成〕 卷之三十一 鞍手郡 福地権現社の項にも豊鐘善鳴録教順伝の引用がみえる。
- (7) 『直方市史』（昭和46年8月）
- (8) 福泉坊文書『福智山権現祠記』〔42代宥海書 宝暦4年（1754）成立〕
- (9) 福泉坊文書『福智山年表及法頭歴代系譜』（幕末から明治初年頃にかけて成立）
- (10) 『曹洞宗全書別巻拾遺』（来島琢道編 佛教社 昭和13年10月）、『豊鐘善鳴録』（直入史談会編 防長史料出版社 昭和54年）
- (11) 福泉坊文書『福智山年表及法頭歴代系譜』「四十三代宥応、旧彦山之人也。（中略）又撰開祖教順法師伝、添入豊鐘善鳴録、茲旧記蠹壞。終因旧志改正者也。」

### III の ぞえ 野添 遺跡群

#### 1. はじめに

平成2年1月中旬、方城町教育委員会から筑豊教育事務所へ、野添地区の工事予定地内に石棺らしきものがあるので確認して欲しい旨の連絡があった。1月下旬、町教委社会教育課の担当者と共に現地立会をしたところ、石棺の蓋石が露頭し、精査の結果、石蓋土壙墓であることが判明した。土壙墓は山頂より西に下った斜面に所在し、周辺部にも同種遺構の存在が予想された。立会には土地所有者の佃立生氏も同行され、2月初旬から重機を入れて山頂部を削平し、その後家屋を新築することであった。そのため、調査についての協議を町教委と佃氏との間で行い、工事着工期限が差し迫っているなか、2月中旬までに調査を終了するという約束のもと発掘の承諾を得た。

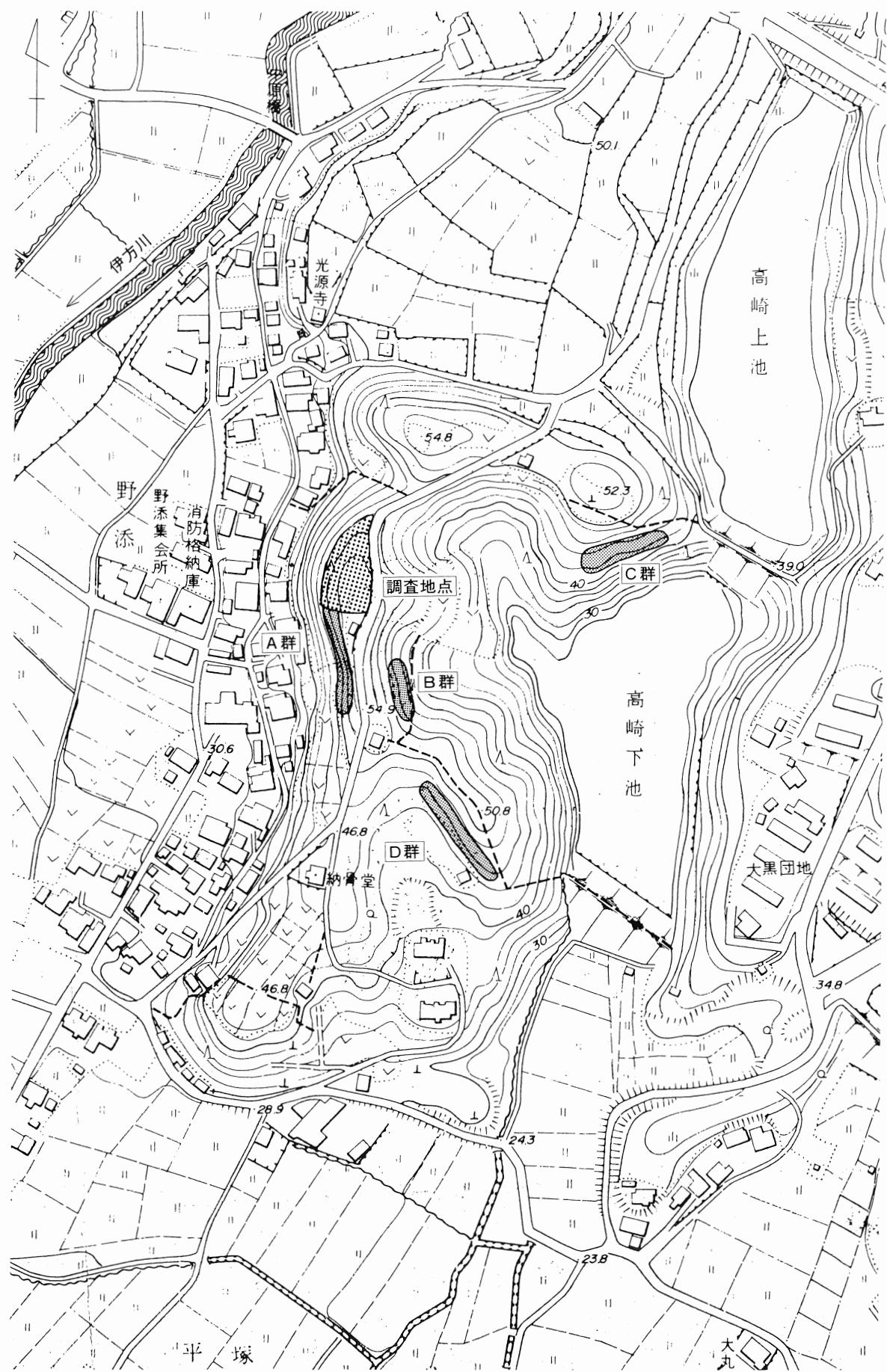
発掘調査は2月1日から開始し、1・2両日は地形測量、3日目からは重機による表土剥ぎと遺構検出作業を開始した。この作業は4日目までに終了したが、当初の予想に反して山頂部は既に削平されていて遺構は無く、当初確認した石蓋土壙墓の周辺に2基の土壙墓を確認したのみであった。都合3基の土壙墓は、順次発掘と記録の作成を行い、調査開始以来7日目の2月9日に作業を終了した。

ところが、半年後の8月10日に、工事現場から刀や剣が発見されたとの連絡が再び町教委からあり、急遽現地へ駆けつけると、去る2月に石蓋土壙墓群の調査をした同じ場所で、重機で地山を2～3m掘り下げた際、横穴墓の天井部が陥没し、玄室内から刀や剣が発見されたのであった。2月の調査ではこの横穴墓は確認できず、横穴墓の入口が前回調査範囲外にあり、またその付近が墓道の痕跡を残していなかったため、横穴墓の存在に気付かなかったものである。念のため工事予定地内でさらに試掘を行ったが、今回発見の横穴墓以外は確認できなかった。一方、発見の時期がお盆直前のことで、発掘調査は盆明けの8月22日から1週間とした。横穴墓の天井には人が入れるほどの穴が開口し、その周囲には多くの亀裂が生じて崩壊の危険性があったため、天井部の上半は重機により削平した。23日には玄室の崩壊土除去作業を始め、併せて24日からは西に延びる墓道の調査も行った。そして、30日までには遺物の取上げや実測作業を済ませ調査を終了した。以上の経過で野添遺跡の発掘調査は、平成2年の2月と8月の2度に亘って実施し、1次調査では3基の土壙墓を、2次調査では横穴墓1基を発掘した。今報告では両者を併せて報告する。調査関係者は次のとおりである。

総括	方城町教育委員会	教育長	長尾 智代喜
庶務担当	同	社会教育課長	高崎 里治（1次）仲村 興亞（2次）
	同	係長	田島 靖
	同	係員	皆川 和枝 中山 正和

調査担当 福岡県教育庁筑豊教育事務所社会教育課 新原 正典

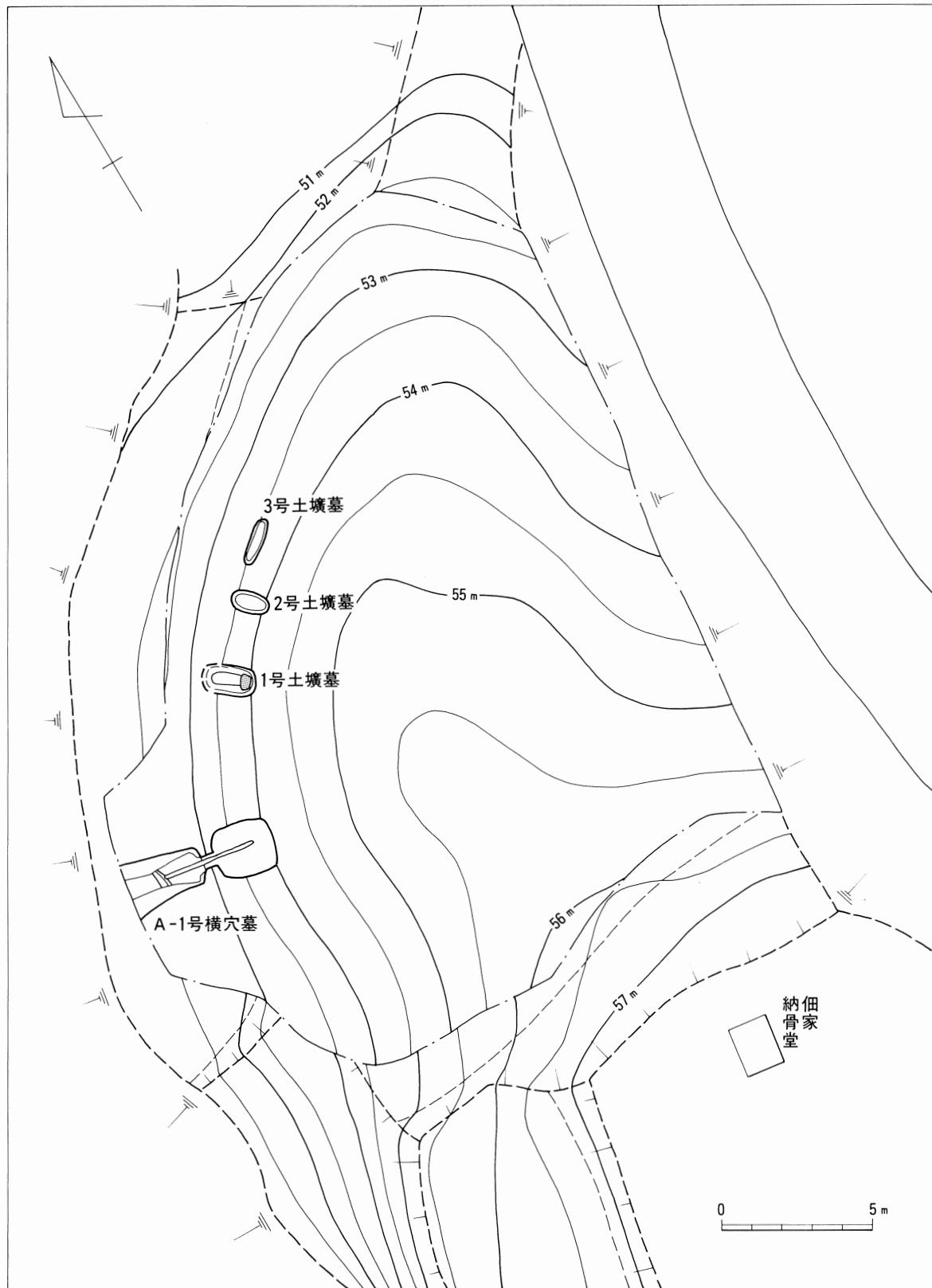
なお、調査に際し、土地所有者の佃立生氏には工事の延期をはじめ多大な御協力を賜わり、町文化財専門委員の植田辰生・永末宏之氏には有益な御助言を頂いた。また、1次調査では筑豊教育事務所社会教育課の井上法行氏、2次調査では嘉穂郡桂川町教育委員会の長谷川清之氏に測量の手伝いを受けた。厚く御礼申し上げます。



第14図 野添横穴墓群分布図 (1 / 3,000)

## 2. 位置と環境

野添遺跡群は、福岡県田川郡方城町大字伊方字野添2407番地他にあり、田川市との境に近い町南部の通称高崎山に所在する。高崎山は、筑豊地区の主峰福智山（900m）から、遠賀川の支流彦山



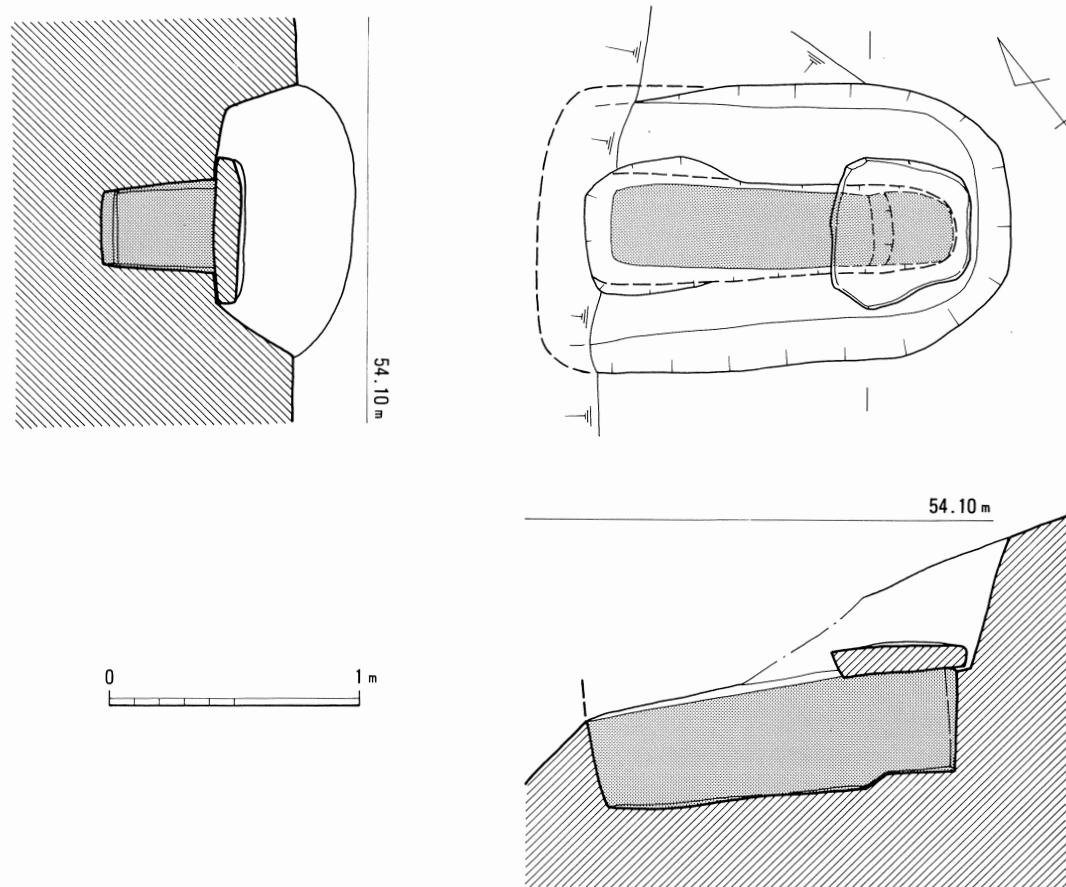
第15図 地形測量図（1/200）

川へ向かって西に派生する丘陵先端部で、彦山川までは1kmの距離にある。高崎山は南北約400m、東西約200m、標高50m級の丘陵で、その丘陵のほぼ全域に古墳時代の横穴墓が分布している。方城町内には他にも多くの横穴墓群が知られ、迫横穴墓群・平原横穴墓群などがあるが、本格的な調査例は少なく、むしろ調査を経ないまま破壊された数の方が多いと言えよう。

高崎山丘陵に多くの横穴墓が所在することは先に触れたが、その分布は第14図に示すように大きくAからDの4群に分かれ。A群は丘陵北部の西斜面に分布し、今回調査したA-1号横穴墓を含むグループで、A-1号墓はA群中の最北端に位置する。A群横穴墓の多くは破壊され、残るのは5基ほどが確認された。B群はA群とは尾根を隔てた東斜面に分布し、5基あまりの横穴墓が確認された。C群は高崎山の北東部、B群の東に谷を挟んで向き合う南斜面にあり、20基ほどの横穴墓が残っている。D群は丘陵南域の西斜面に位置し30基余りが確認され、4群中最も多くの横穴墓で構成される。

これら野添横穴墓群のうちの幾つかは調査例があり、昭和44年の町誌発行に伴う調査では、羨道部に石組の痕跡を示す横穴墓が確認され、昭和49年5月の新聞記事は、尾根を南北に通る農道工事の際に横穴墓1基が開口し、5体の人骨とともに碧玉製管玉20個・青銅製釧1個などが出土したと伝え、さらに十数年前には瑪瑙製勾玉や鉄鏃などが出土したという。いずれにせよ、野添横穴墓群は消滅したものや未発見の分まで含めると、その総数は100基に近い数で構成された一大横穴墓群であり、横穴墓が多く分布する彦山川流域でも最大級の横穴墓群と言えよう。

一方、開墾により破壊されたが、丘陵先端部には横穴式石室を有する円墳の高崎山古墳があり、

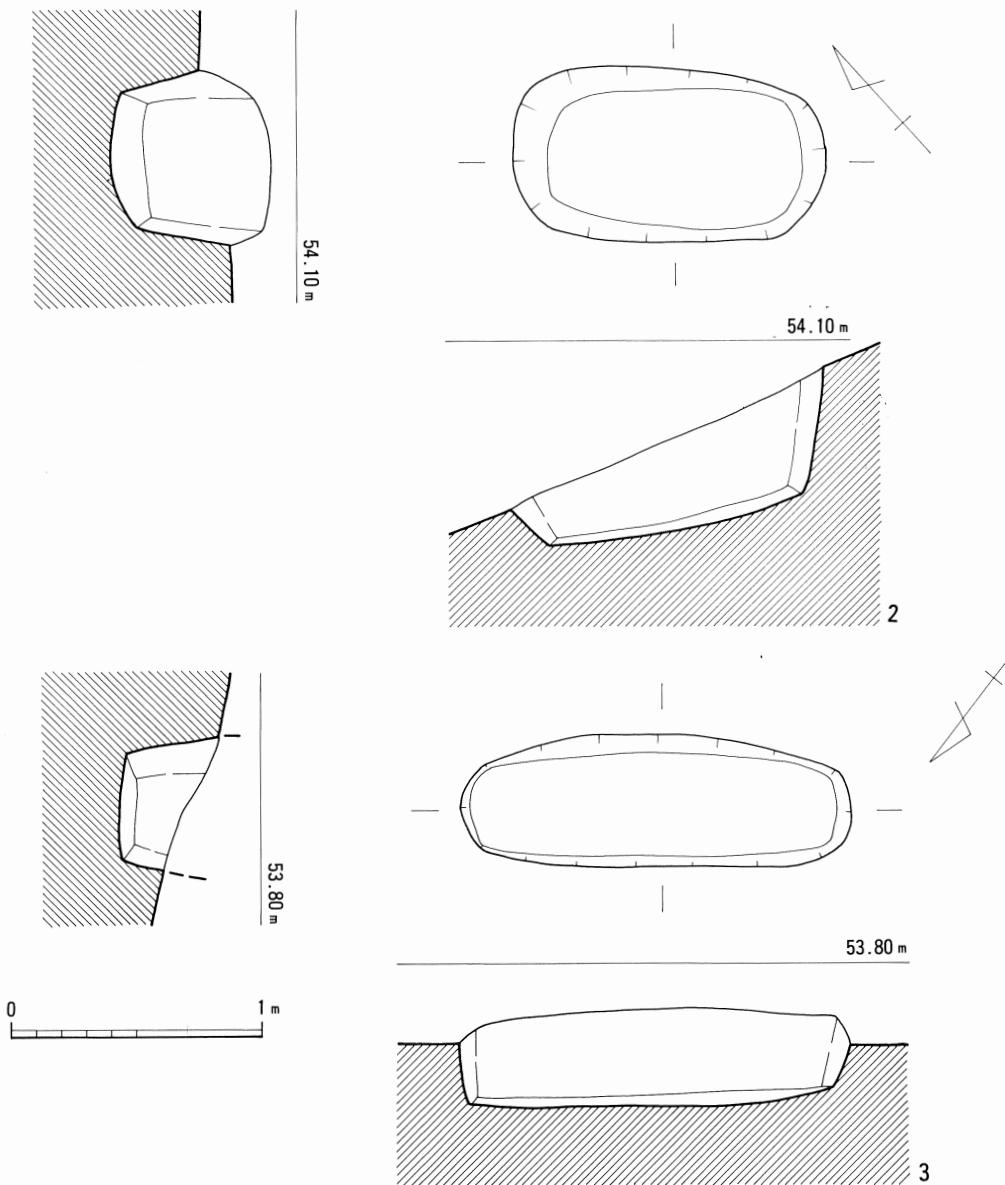


第16図 1号石蓋土壙墓実測図（1/30）

鹿角装刀子・瑪瑙製勾玉・ガラス製小玉などが出土したというし、B群からD群へ至る尾根上の山道脇には石棺墓らしきものが一部露出していて、この種の遺構の存在も知られる。今回、極一部の調査を行った高崎山丘陵部は、開発が進んだ方城町内では残り少ない貴重な各種の埋蔵文化財包蔵地区であり、今後の保存処置が望まれる。

### 3. 発掘調査の概要

調査を実施した箇所は、南北に延びる高崎山丘陵北端の西斜面の一部である。地形は、尾根を通る農道と丘陵側端との間の緩斜面地で、三角形の形状をなし、調査面積は約400m<sup>2</sup>である。重機により遺構検出を行ったが、尾根寄りの箇所は既に削平され、丘陵西斜面にて土壙墓3基と、天井部が陥没した横穴墓1基が検出された。これら遺構が掘り込まれた層は、かって石炭を産出した筑豊地方に特有な古第三紀層の風化した地層である。



第17図 2・3号土壙墓実測図 (1/30)

## (1) 土 墳 墓

### 1号石蓋土墳墓（図版16、第16図）

調査の契機となった遺構で、既に蓋石が露出していた。今回発見の3基の土墳墓の中では最も南に位置する。土墳墓の主軸はN-52°-Wで、尾根と直交する形で掘られている。土墳墓の西上半部は削平されているが、上段に長さ（復原値）190cm、幅110cm、深さ50cmの長方形の墳を掘り、その底面に長さ140cm、幅30cm、深さ45cmの被葬者を収納する埋葬墳を掘った二段掘りの土墳墓である。蓋石は上段墳底面に構架されるが、東端の1枚しか遺存せず、2枚は下段の墓墳に転落していた。本来は4枚の構架であったろう。3枚の蓋石は花崗岩である。下段墓墳の底面は平坦だが西へ傾斜し、東端は高さ7cm、奥行き28cmの範囲で一段高く造り、枕としている。東頭位である。下段墓墳内にはベンガラと思われる赤色顔料の塗布がみられた。副葬品の出土はない。

### 2号土墳墓（図版17-2、第17図2）

1号石蓋土墳墓の北2.5mにて検出した素掘り1段の土墳墓で、西上半部は削平されている。主軸はN-48°-Wにとり、1号土墳墓同様尾根に対し直交している。頭位は分からぬ。平面は隅丸の短長方形で、棺底面での規模は長さ101cm、幅54cm、深さは50cmを測る。底面は西へ傾斜し主軸中央部が窪む。棺内には赤色顔料の塗布や、副葬品もない。

### 3号土墳墓（図版17-3、第17図3）

2号土墳墓の北2mにて検出した素掘りの土墳墓で、西上半部は削平されている。1・2号土墳墓とは主軸方向を異にしてN-52°-Eにとり、尾根とほぼ平行に造られている。2号土墳墓同様素掘り1段で、長い隅丸長方形をなす。棺底面での規模は長さ145cm、幅42cm、深さ38cmを測る。底面は平坦で南側がやや浅い。棺内には赤色顔料の塗布や、副葬遺物もない。

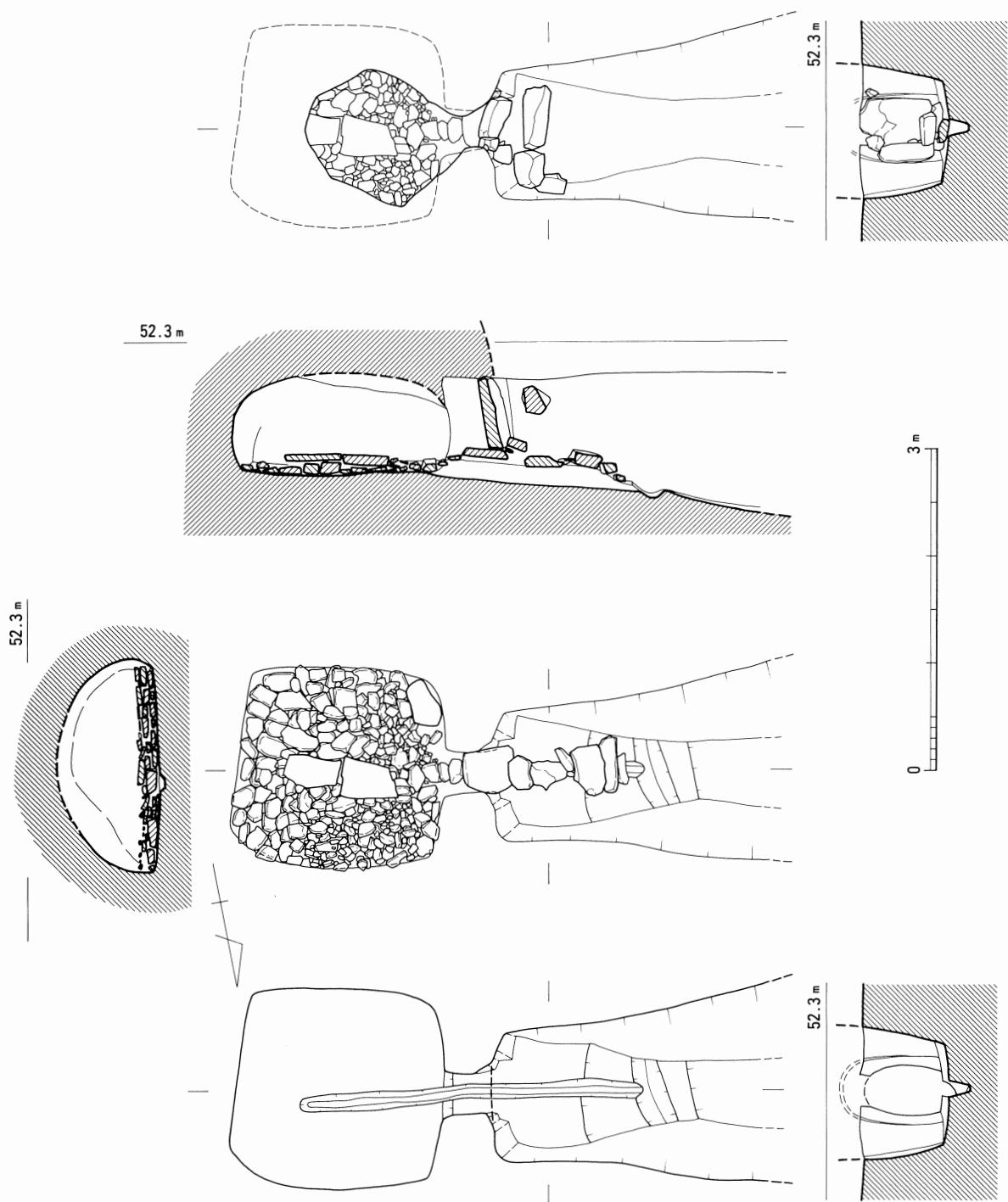
## (2) 横 穴 墓

### A-1号横穴墓（図版18~22、第18~26図）

工事中に天井の一部が陥没して発見された横穴墓で、前章で触れたように、現地の南域には野添横穴群の一支群が分布し、それをA群としたことから、今回発見した横穴墓をA-1号墓とした。

**玄室** 主軸方位はN-82°-Wで、ほぼ真西に開口する。平面形態は隅丸方形で、直線的な奥壁に対し他の3辺は外膨らみとなる。規模は主軸長193cm、幅190cmで、天井は崩落防止のため削平したが高さは復原値で約95cmを測る。立面形は縦断面は蒲鉾型、横断面は半円型にちかく、所謂ドーム形に区分されよう。周壁四隅には、床面から立ち上がる甘い稜が中位まで見られる。また、中央の床面には、奥壁の手前から始まる幅15cm、深さ5~20cmの排水溝が掘られ、羨道を通じて墓道中途まで約3.2mの長さで直線的に延びている。床面の敷石は概ね二重で、小礫部分では三重となる箇所もある。上面は追葬時の敷石、下面是初葬時の敷石であろう。このことは、副葬品玉類の殆どが上面敷石の下から出土していることからも裏付けられよう。ただ、下面の敷石については充分な調査が出来なかった。上面の敷石は、奥壁から右側壁にかけては人頭大の礫が、左側壁から玄門部側は小円礫が配されている。さらに、排水溝上には大きめの角石が蓋石として意識的に架せられている。

**羨門** 玄室から墓道へ通じる羨門は長さ65cm、幅38cmを測る。天井部は壊れているが高さは約75



第18図 A-1号横穴墓実測図 (1 / 60)

cm程で、アーチ形であったろう。羨門の床面は玄室床面より10cmほど高い。羨門入口側には、閉塞石を立て掛けたための飾り縁状の門構が10cm幅で造られている。

**墓道** 墓道は全長5m以上であろうが、半分しか掘れなかった。羨門側での幅は1m、排水溝先端付近で55cmと狭くなり、墓道入口側では再び広くなる。墓道床面は、羨門から70cmの所で傾斜がつき、そこから約50cmの距離に排水溝出口がある。この出口端は幅50cm、深さ10cm弱の墓道と直交する溝に掛かっている。また、羨道から墓道にかけての排水溝蓋にも大きめの角石を被せている。

**閉塞石** 羨道部の飾り縁部には60×70cm、厚さ10cmの花崗岩方形割石を立て掛け、玄室を閉塞している。だが、この割石1枚では密閉できず、左側壁との隙間に幅20cmの細長い花崗岩と15cm大の砂岩角石を積んで充填している。さらに、閉塞石から40cmほど墓道側に寄った箇所でも、墓道右壁側と上部にだけ割石を横長に積んだ石組が見られた（図版5-2）。玄室側の閉塞石を墓道側から更に補強したものであろうか。また、閉塞石のうち、花崗岩方形割石の玄室側の面が赤色顔料で塗布されていた。今回の調査でも、周辺から赤色顔料を塗布した弥生時代の石蓋土壙墓が出土していることから、横穴墓築造時に偶然発見された土壙墓などの蓋石の転用も考えられよう。

#### 遺物出土状況（第19図）

玄室や墓道からは以下の遺物が出土した。とくに、玄室は未開口であったため多くの副葬品が一括で発見された。ただ、残念なことに、青銅製鉤は、調査中盗難に遭い紛失してしまった。実測や写真撮影前のこととそれに関する記録も一切なく、調査担当者の不注意であったと反省している。

#### [玄室出土品]

装身具	銅鉤 1	銅鈴 1	勾玉 4	管玉 21
		ガラス丸玉140+α	ガラス小玉18+α	
武 器	大刀 1	鉄劍 1	鉄鎌44+α	
農工具	鉄斧 1	鉄鎌 1	鉄刀子 4	鉄鑿 1
石製品	砥石 2			

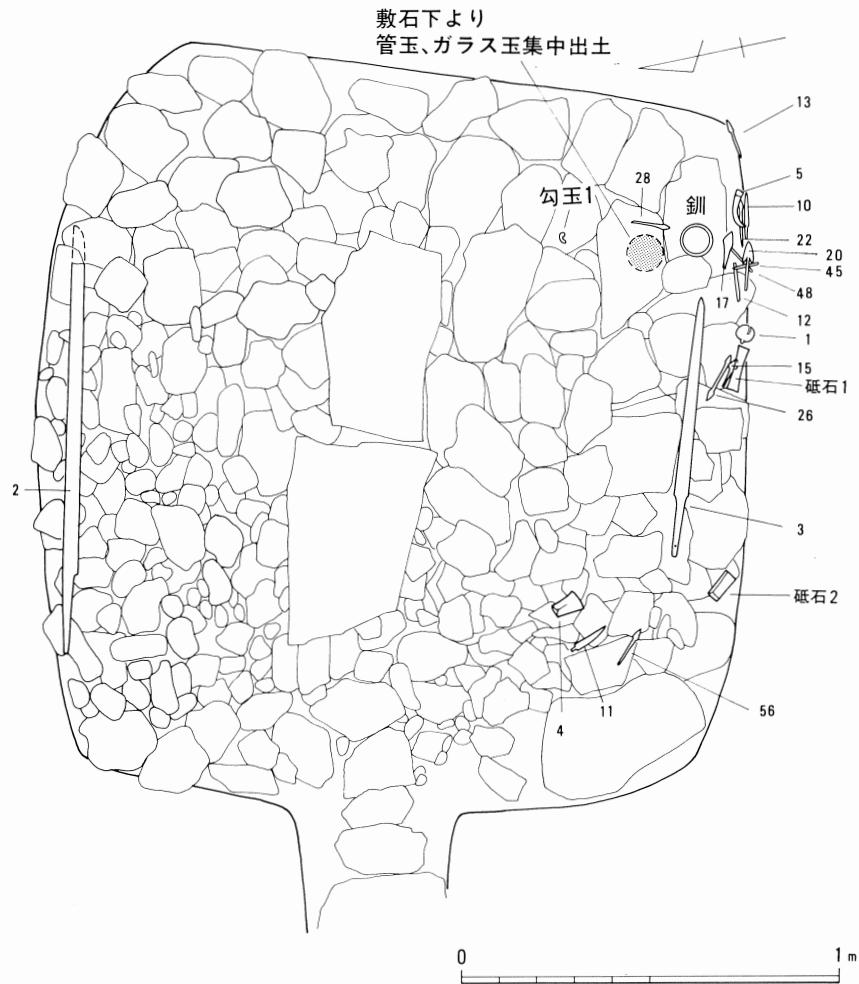
#### [墓道出土品]

土 器	須恵器高杯 1	須恵器長頸壺片 2	須恵器甕片 5	土師器脚付小壺 1
装身具	ガラス丸玉 1			

今回調査したA-1号墳は、重機により横穴墓天井部の一部が削平されて開口し、作業者が陥没口から玄室内へ入り、玄室両脇にあった大刀と鉄劍を動かしたため、それらの原位置は不明であるが、それ以外の遺物は原位置である（第19図の遺物配置図の番号は遺物実測図番号と一致する）。従って、鉄刀と鉄劍の位置は作業者からの聞き取りにより刀は左側壁前に、剣は右側壁前に再配置したもので、紛失した銅鉤は、右側壁側の鉄劍切先近くに置かれていた。

副葬品出土状況は、左側壁側に大刀2が1本あるだけで、他の副葬品は右側壁側に偏った配置で出土した。大刀は左側壁面から10cm程離れてあったらしいが、切先が奥壁あるいは入口側にあったのか、刃部はどちら向きにあったのかは分からぬ。一方、右側壁側からは、大刀以外の副葬品が出土した。鉄劍3は右側壁より50cm離れた中央部にあったと言うが、大刀同様に切先の位置についても不明である。鉄劍と側壁の間からは、銅鈴1や砥石1、鎌15・26が出土した。奥壁側では側壁寄りに鎌5、刀子10、鑿13、鎌17・20・22・45・48やその下から他の鎌が集積した状態で出土した。また、剣の切先付近では鉤が、玄室中央よりの位置では鎌28や勾玉1が出土した。さらに、この付

近の敷石の下からは多数の管玉やガラス玉が出土した。また、玄門側の位置では、斧4や鎌56、刀子11、砥石2が出土した。前章でも述べたように、玄室の床面には上下二面におよぶ敷石が敷かれ、装身具のうち上面敷石下から出土した勾玉や管玉、それにガラス玉などは下面敷石に伴う初葬時の副葬品で、上面敷石上出土の大刀・剣・鉄工具などは追葬時の副葬品であろう。



第19図 A-1号横穴墓玄室内遺物出土状況実測図（1/20）

## 遺 物

### (ア) 装身具

#### 勾玉 (図版21、第20図1~4)

瑪瑙製2、翡翠製1、ガラス製1の4個が出土した。1は半透明の濃い茶色瑪瑙製で、上面敷石からの出土はこれ1点のみである。長さ3.46cm、幅2.1cm、厚さ0.94cm、重さ8.35gを測る。片面からの穿孔で、孔径は3.1mm。2も半透明の薄い茶白色瑪瑙製で、形状は角張り「コの字」状をなす。長さ3.22cm、幅1.9cm、厚さ0.86cm、重さ7.15gを測る。穿孔は片面からで、孔径は3mm。3は翡翠製で濁った淡緑白色をなす。長さ2.86cm、幅1.76cm、厚さ0.86cm、重さ8.9gを測る。穿孔は片面からで、孔径は3.5mmある。4はガラス製で細身、濁青灰色を呈す。長さ2.9cm、幅1.47cm、厚さ0.78cm、重さ3.55g。孔径は2.3mmある。

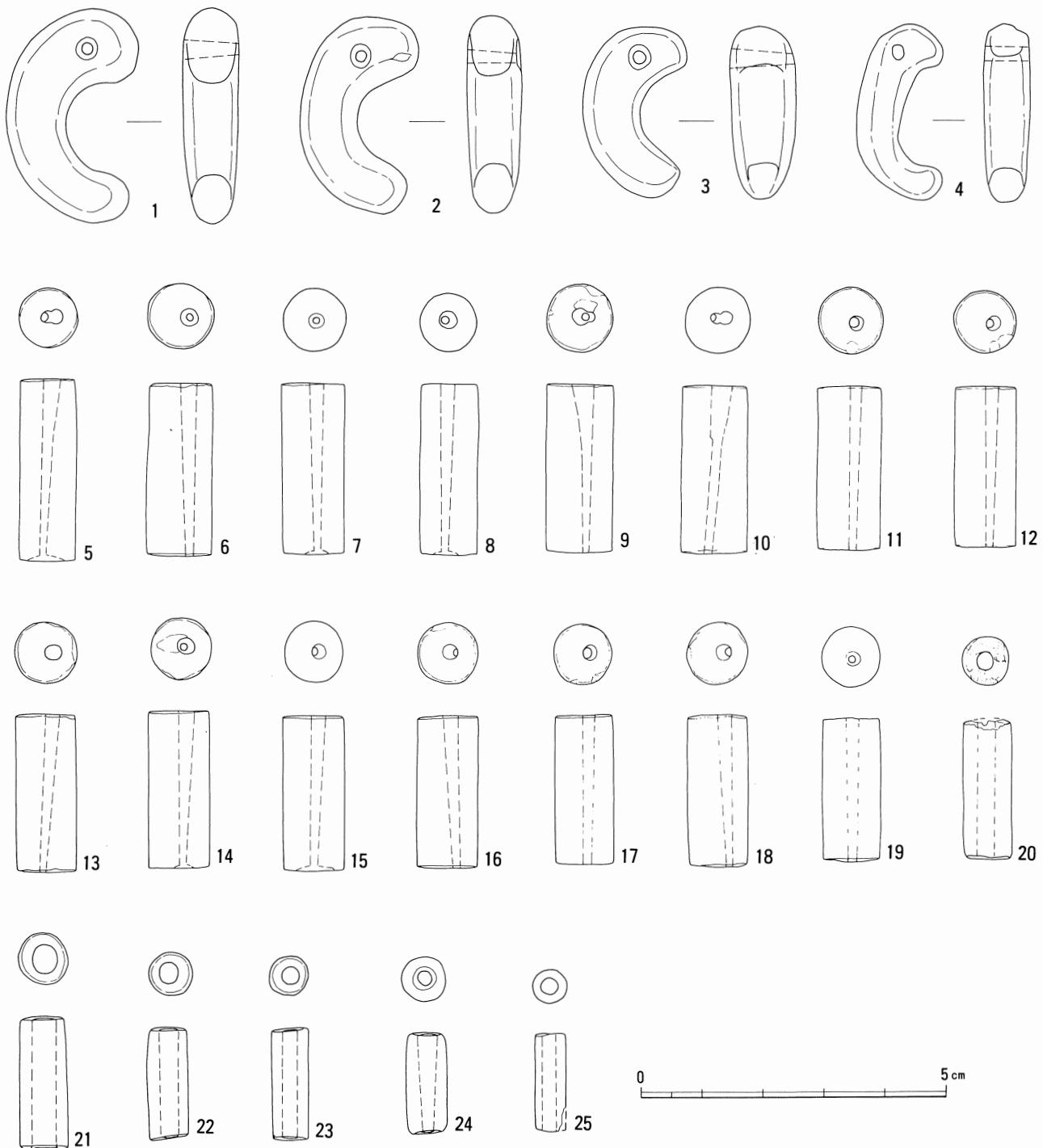
#### 管玉 (図版21、第20図5~25、第1表)

5~19は碧玉製で15個、20~25はガラス製で6個の計21個の管玉が出土した。計測値は第1表に示す。碧玉製は7の淡深緑色以外はいずれも深緑色で、ほとんどに縞状の脈が見られる。碧玉製管玉のサイズはさほどバラツキがなく、最大長は5の2.95cm、最小は19の2.37cmで、重さは9が最大で6.4g、最小は19の4.35g。穿孔はすべて片面方向からである。ガラス製は25が明るい淡青白色

で、それ以外は濁った淡緑色系と色調は明らかに2分される。最大長は20で2.31cm、最小は25の1.57cmで、最大径は20の0.84cm、最小は25の0.55cmである。重さも20が最大で2.3g、最小が25の0.9gである。

#### ガラス丸玉（図版21、第21図1～30、第2表）

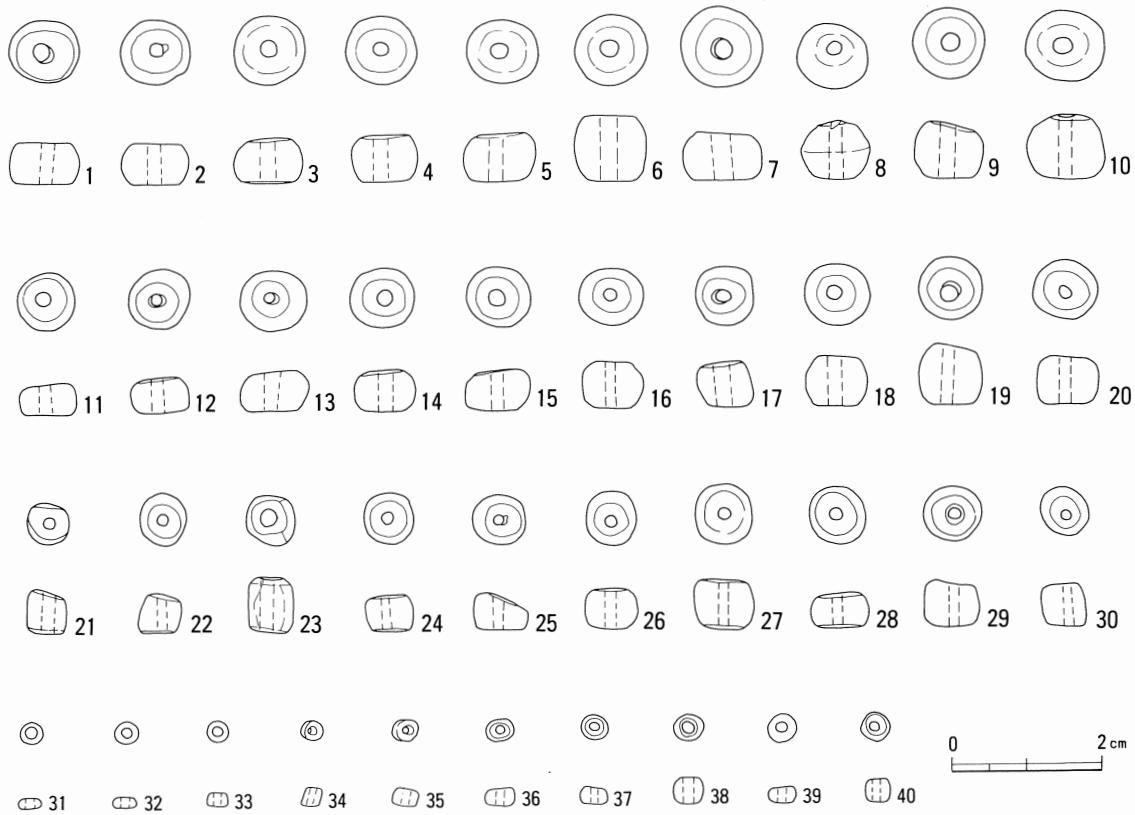
多数のガラス製玉が出土した。別にガラス製小玉と分類したものもあるので、ここでは径が6mm以上のものを丸玉として扱い、140個+αを数える。これらを、径の大きさから、9mm以上の大（図1から10）、8mmの中（図11～20）、6～7mmの小（図21～30）の3種に分類し、実測図もそれ



第20図 玉類実測図1 (1/1)

No.	外 径 (mm)		孔 径 (mm)		長さ (mm)	重さ (g)	色 調	材 質	備 考	実測図番号
	上端	下端	上端	下端						
1	10.60	10.50	2.6	0.8	28.35	6.25	深緑色	碧玉		5
2	10.0	10.0	2.1	0.9	25.00	4.8	"	"		6
3	9.8	10.0	2.25	1.0	24.70	4.7	"	"		7
4	10.15	9.9	2.7	0.9	25.80	5.1	"	"		8
5	9.55	9.45	3.0, 2.4	1.2	29.55	5.2	"	"	穿孔重複	9
6	10.35	10.25	2.5	1.0	28.05	5.85	淡深緑色	"	一端凹む	10
7	10.75	10.00	3.1	1.0	27.50	6.35	"	"	穿孔重複	11
8	10.60	10.50	2.2	1.1	26.75	5.8	"	"		12
9	9.70	9.65	2.5	1.0	23.75	4.35	"	"		13
10	9.45	9.60	2.6	1.0	28.00	4.95	"	"	一端凹む	14
11	10.20	10.25	2.3	1.1	25.55	5.25	"	"	"	15
12	10.15	10.30	2.3	1.2	26.30	5.4	"	"		16
13	10.20	10.10	2.4	1.1	25.50	5.05	"	"	一端凹む	17
14	9.60	9.80	2.2	1.2	24.85	4.55	"	"		18
15	11.00	10.90	2.5	0.9	27.60	6.4	"	"	一端凹む	19
16	8.45		3.2		23.10	2.3	淡緑灰色	ガラス	一端破損	20
17	8.30		4.1		21.60	2.15	"	"		21
18	6.40		2.75		18.25	1.1	"	"	気泡多し	22
19	7.30		3.15, 1.90		16.40	1.2	緑灰色	"		23
20	7.50		3.0		18.30	1.25	"	"		24
21	5.5		2.2		15.70	0.9	淡青白色	"	一端破損	25

第1表 管玉計測表



第21図 玉類実測図 2 (1 / 1)

No.	外径(mm)		厚さ(mm)		孔径(mm)	重さ(mg)	色調	材質	備考	実測図番号
	最大	最小	最大	最小						
1	9.35	8.25	5.9	5.5	2.1, 2.0	700	暗い青	ガラス		1
2	9.1	8.4	5.55	5.15	1.6, 1.4	650	こい青	"		2
3	9.5	8.9	6.1	5.6	2.0, 1.8	700	"	"		3
4	9.1	8.75	6.35	6.0	1.8, 1.6	750	暗い青	"		4
5	9.7	8.25	6.4	6.1	2.0	800	青	"		5
6	9.7	9.2	8.6	8.4	2.1, 2.0	1,100	こい青	"		6
7	10.6	10.3	6.4	5.75	2.9,	1,000	青	"		7
8	9.35	8.7	7.75	7.0	2.3, 1.7	800	暗い青	"	算盤に近い形状	8
9	9.55	9.35	7.3	6.3	2.4, 2.0	900	青	"		9
10	10.25	9.2	8.2	7.3	2.0, 1.9	1,100	こい青	"		10
11	9.8	8.0	7.0	6.7	1.15, 1.1	800	暗い青	"	楕円形	
12	9.75	9.4	7.95	7.5	2.85, 2.5	1,050	"	"		
13	10.5	9.0	7.3	7.0	2.7, 2.5	1,050	こい青	"		
14	9.6	8.65	6.5	5.8	2.4, 2.7	800	青	"		
15	9.2	9.0	8.3	7.8	2.2, 1.9	1,000	"	"		
16	9.3	7.45	7.9	7.45	1.4, 1.5	800	"	"		
17	10.0	8.55	8.5	8.1	2.1, 2.0	1,100	こい青	"		
18	9.65	9.1	7.6	5.7	1.4, 1.3	800	"	"		
19	9.2	8.1	7.0	6.8	2.2, 2.3	800	"	"		
20	9.65	7.9	6.0	5.6	1.5, 1.6	650	"	"		
21	9.0	8.2	6.8	6.6	1.7, 1.5	700	青	"		
22	9.55	7.75	6.7	6.0	1.5, 1.4	750	"	"		
23	9.0	8.45	6.2	5.8	1.3, 1.2	700	"	"		
24	10.0	9.8	7.4	7.0	2.2, 2.1	1,000	こい青	"		
25	9.65	8.6	7.0	6.65	1.7, 1.6	900	"	"		
26	9.4	8.5	7.8	7.15	1.6, 1.5	900	青	"		
27	9.3	8.5	6.9	6.75	2.6, 2.7	800	こい青	"		
28	9.9	8.3	6.9	6.6	1.2, 1.1	800	青	"		
29	9.35	8.15	6.6	6.5	1.7, 1.6	750	"	"		
30	9.4	8.5	6.4	5.85	1.4, 1.6	700	"	"		
31	9.6	8.3	6.9	6.5	1.4, 1.5	800	こい青	"		
32	9.3	8.45	6.5	6.3	1.7, 1.8	750	"	"		
33	9.55	9.2	6.6	6.15	3.0 3.0	900	"	"		
34	9.75	8.8	6.5	6.4	2.2 2.2	750	"	"	一部欠、風化著しい	
35	9.1	8.9	6.9	6.6	1.8 1.9	850	"	"		
36	9.5	8.4	6.9	6.6	1.7 1.4	800	青	"		
37	9.25	8.9	6.0	5.8	1.4 1.7	700	こい青	"		
38	9.1	8.8	7.4	6.8	1.3	900	"	"		
39	9.1	8.15	6.7	6.5	1.4 1.3	800	"	"		
40	9.3	9.2	6.2	5.7	1.9	800	青	"		
41	9.1	8.2	6.6	6.3	1.5, 1.3	700	こい青	"		
42	9.15	8.35	6.8	6.3	1.6, 1.5	800	"	"		
43	9.55	8.3	8.3	8.2	1.5, 1.5	1,000	青	"		
44	9.4	8.9	7.1	6.9	1.5, 1.6	900	こい青	"		
45	9.1	8.7	7.2	7.0	1.6, 1.7	900	"	"		
46	9.1	8.5	6.4	6.1	2.2, 2.3	700	"	"		
47	9.3	8.8	8.0	7.6	1.7, 1.6	900	"	"		
48	9.25	8.5	7.2	6.5	1.6	800	"	"		
49	9.5	8.6	8.0	7.6	1.3	900	"	"		
50	9.4	8.3	7.2	6.5	1.9, 2.0	900	"	"		
51	9.2	9.1	7.0	6.6	1.4, 1.3	900	青	"		
52	8.0	7.6	4.25	3.5	1.6, 1.3	350	"	"		11
53	8.5	8.0	4.7	4.2	1.8, 1.5	450	こい青	"		12
54	8.9	7.9	5.55	5.2	1.3, 1.4	600	暗い青	"		13
55	8.7	8.0	5.6	5.5	1.9, 1.7	600	青	"		14
56	8.85	8.3	5.25	5.1	1.6,	600	こい青	"		15
57	8.9	7.6	6.25	6.0	1.3	600	暗い青	"		16
58	8.1	7.35	6.5	6.0	3.0, 2.3	500	明るい青	"	側面角張る, 孔橢円	17
59	8.35	8.0	6.55	6.3	1.9,	600	暗い青	"		18
60	8.2	8.1	8.1	7.6	2.4, 2.2	750	青	"		19
61	8.15	7.55	6.1	6.0	1.7, 1.4	600	暗い青	"	孔橢円	20
62	8.75	7.5	6.9	6.55	1.6, 1.3	650	こい青	"		
63	8.3	7.85	7.1	6.75	1.3, 1.2	700	暗い青	"	側面角張る	
64	8.5	8.15	6.85	6.7	1.7	700	こい青	"		
65	8.85	8.1	8.0	7.5	1.4, 1.3	850	"	"		
66	8.85	8.35	6.0	5.56	1.8,	650	"	"		

No.	外径(mm)		厚さ(mm)		孔径(mm)	重さ(g)	色調	材質	備考	実測図番号
	最大	最小	最大	最小						
67	8.6	7.8	7.9	7.45	1.3	800	青	ガラス		
68	8.0	7.8	5.95	5.6	1.5, 1.4	550	"	"		
69	8.15	7.3	7.8	7.25	1.4	700	こい青	"		
70	8.15	7.7	5.7	5.4	2.0,	500	青	"		
71	8.95	8.3	6.6	5.65	1.9, 1.7	700	こい青	"		
72	8.5	7.7	6.3	5.5	1.8, 1.7	600	"	"		
73	8.25	7.7	6.15	5.5	1.4, 1.6	550	暗い青	"		
74	8.2	8.1	6.15	5.7	1.5, 1.4	600	青	"		
75	8.6	7.85	7.0	6.8	1.4, 1.2	700	こい青	"		
76	8.5	8.3	5.95	5.65	1.6, 1.5	600	"	"		
77	8.2	8.0	5.5	5.15	1.9, 1.8	500	青	"		
78	8.65	8.25	6.9	6.55	1.9, 1.8	700	こい青	"		
79	8.0	7.6	5.8	5.6	1.5, 1.4	550	"	"		
80	8.7	7.9	5.35	5.0	1.5, 1.2	550	青	"		
81	8.7	8.25	5.2	4.6	1.5, 1.7	500	暗い青	"		
82	8.55	8.15	6.6	6.0	1.8, 1.5	700	こい青	"		
83	8.45	7.7	6.25	5.85	1.6, 1.7	600	"	"		
84	8.75	7.75	7.0	6.8	2.0, 1.8	750	青	"		
85	8.65	7.95	6.15	5.65	2.0,	650	こい青	"		
86	8.5	8.15	6.9	6.7	1.7,	700	青	"		
87	8.3	8.05	5.0	4.8	2.0, 1.8	500	"	"		
88	8.5	8.0	5.95	5.9	1.4,	600	こい青	"		
89	8.65	7.95	6.75	6.45	2.1, 2.0	700	"	"		
90	8.6	7.65	7.4	7.2	1.0, 1.2	800	"	"		
91	8.75	8.1	6.1	5.7	1.7, 1.5	650	"	"		
92	8.9	8.45	5.95	5.65	2.1,	700	"	"		
93	8.2	7.7	6.4	6.0	1.8, 1.7	600	青	"		
94	8.75	7.9	6.65	6.35	2.0,	700	こい青	"		
95	8.8	8.1	6.65	6.4	1.9,	700	"	"		
96	8.55	8.0	5.4	5.1	1.8, 1.7	600	青	"		
97	8.75	8.25	5.75	5.3	1.2, 1.1	600	こい青	"		
98	8.55	7.0	6.1	5.9	1.4, 1.1	600	青	"		
99	8.55	8.0	5.9	5.75	1.4, 1.3	600	"	"		
100	8.6	7.9	5.6	5.1	2.3, 2.2	600	"	"		
101	8.15	7.0	5.7	5.4	1.3, 1.2	500	"	"		
102	8.15	7.15	6.3	6.0	1.4, 1.3	550	明るい青	"		
103	8.6	8.3	7.15	6.55	1.4,	800	こい青	"		
104	8.6	8.15	6.6	6.0	1.6, 1.7	700	"	"		
105	8.8	8.1	7.0	6.6	1.4,	750	暗い青	"		
106	8.1	7.75	6.55	5.85	1.9, 1.7	600	青	"		
107	8.55	7.9	6.3	5.75	1.8,	650	こい青	"		
108	8.4	8.0	7.25	6.7	1.4, 1.2	700	"	"		
109	8.7	8.15	6.35	6.0	1.7, 1.6	700	"	"		
110	8.1	7.6	5.7	5.4	2.0, 1.9	500	青	"		
111	8.1	7.85	6.8	6.6	1.6, 1.4	700	"	"		
112	8.6	7.5	6.4	6.3	1.6, 1.85	700	"	"		
113	8.45	7.2	6.5	6.1	1.4, 1.2	600	こい青	"		
114	8.65	7.55	5.7	5.6	2.2	600	"	"		
115	8.6	7.8	6.55	6.0	1.8, 2.0	600	青	"		
116	8.2	8.0	5.55	5.0	1.7, 1.6	550	こい青	"		
117	8.5	8.2	6.6	6.4	1.7, 1.6	700	"	"		
118	8.1	6.9	6.3	6.0	1.2, 1.1	550	青	"		
119	8.65	7.25	6.6	6.4	1.5,	700	こい青	"		
120	8.8	7.15	5.6	5.25	1.5,	550	青	"		
121	8.55	7.75	5.85	5.7	1.3,	600	こい青	"		
122	8.6	8.2	6.55	6.1	2.0	700	"	"		
123	8.8		6.0			"	"	2割方欠けている		
124	6.0	5.6	5.7	5.05	1.8, 1.6	250	"	"		21
125	6.8	6.6	5.15	4.7	1.35, 1.45	300	"	"		22
126	6.8	6.3	7.25	7.0	2.0	400	青	"	角張っている	23
127	7.15	6.85	5.05	4.8	1.4, 1.5	350	緑味青	"		24
128	7.4	6.85	6.65	3.65	1.15, 1.0	400	こい青	"		25
129	7.45	7.15	5.4	5.1	1.5, 1.35	400	"	"		26
130	7.95	7.75	6.65	6.4	1.3, 1.2	600	"	"		27
131	7.75	7.25	4.4	4.0	1.4, 1.2	350	"	"		28
132	7.85	7.4	5.75	5.35	1.0	500	暗い青紫	"		29

No.	外径(mm)		厚さ(mm)		孔径(mm)	重さ(mg)	色調	材質	備考	実測図番号
	最大	最小	最大	最小						
133	6.7	6.0	5.8	5.45	1.1, 0.9	450	こい青	ガラス		30
134	7.7	7.2	5.65	5.5	1.6	450	"	"		
135	7.65	7.45	5.75	5.6	1.1	500	"	"		
136	7.65	7.35	6.5	6.35	1.3	500	"	"		
137	7.9	7.5	6.2	6.0	1.6	550	"	"		
138	7.85	7.2	6.0	5.65	1.15, 1.35	500	"	"		
139	6.9	6.8	5.2	5.25	1.8	450	"	"		
140	7.55	6.4	6.5	5.5	1.25, 1.2	400	"	"		

第2表 ガラス丸玉計測表

それ10個ずつ作成し、すべての計測値は第2表に示した。分類別の数は、大51、中72、小17個である。しかし、径の分類による形状・色などの違いはほとんどない。色調は青あるいは濃紺系で、スカイブルーも数点ある。また、孔と同方向に気泡の脈が見られることから、引伸法による製作であろう。これら140個のガラス製丸玉の総重量は約94 gを量る。また、墓道埋土からもガラス丸玉が1個出土している。径9.1mm、厚6.35mm、重さ60mgで、暗い青緑色を呈し、玄室出土の紺色を主体とした丸玉群とは色調を異にしている。

#### ガラス小玉（図版21、第21図31～40、第3表）

ガラス製玉のうち径が3 mm前後のものを小玉とした。18個あり破片も10点ちかくある。18個の計測値は第3表に示し、うち10個を図示した。いずれも、径は3.9～2.6mm、厚は3.4～1.25mmの中に収まる。18個の総重量は0.6 gを量る。これら小玉の色調は青色がほとんどで、1点のみ緑色がある。また、気泡の脈が見られるものもある。

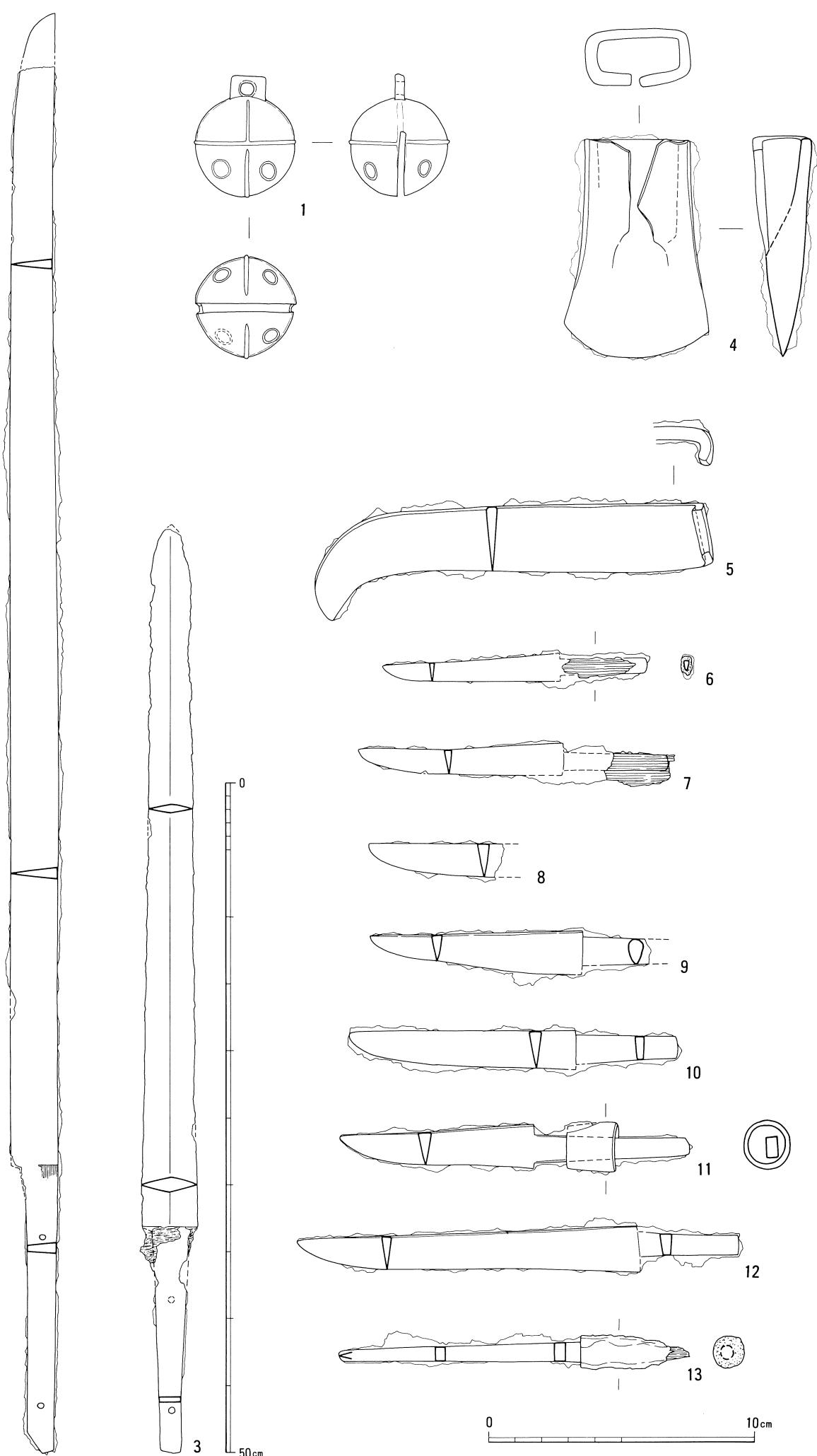
No.	外径(mm)		厚さ(mm)		孔径(mm)	重さ(mg)	色調	材質	備考	実測図番号
	最大	最小	最大	最小						
1	2.85	2.75	1.25		1強		明るい青灰	ガラス	最小	31
2	3.0	2.9	1.55		1弱		"	"		32
3	2.85	2.75	1.9		1強		こい青	"		33
4	2.6	2.4	2.3		"		明るい青	"		34
5	3.4	2.9	2.4		"		明るい青緑	"		35
6	3.9	3.5	2.55		"		こい青	"		36
7	3.85	3.7	2.25		"		明るい青灰	"		37
8	3.9	3.6	3.4		1.5		こい青	"		38
9	3.9	3.7	2.3		1		"	"		39
10	3.8	3.65	3.3		"		"	"		40
11	3.6	3.5	2.25		1弱		"	"		
12	3.6	3.4	2.3		1		明るい青	"		
13	3.4	3.3	2.0		1弱		"	"		
14	3.5	3.3	1.7		1.5		"	"		
15	3.4	3.1	2.1		1		こい青	"		
16	3.35	3.25	1.95		"		明るい青	"		
17	3.0	3.0	1.95		"		"	"		
18	3.3	3.3	1.7		1.5		"	"		

第3表 ガラス小玉計測表

銅釧 調査中に盗難にあい写真もない。円環形で外側面には刻み目があったように記憶している。

#### 銅鈴（図版21、第22図1）

馬具の一部かも知れないが装身具とした。青銅製で完形品である。表面は実用による磨滅部分も認められるが、緑青を吹き錆膨れも多い。鈴までの総高は4.5cm、重さ50.3 gを測る。鈴は13×9 mmの方形で径5 mmの円孔があく。球形の胴部は縦・横ともほぼ3.6cmで正円にちかい。胴部は前・



第22図 銅製品・鉄製品実測図1 (2・3は1/4、その他は1/2)

背面ともに隆起突帯で十字に区画し、下部の四区画内にはそれぞれ1個の環状浮文を配すが、うち1個は鋸彫れで損傷している。幅約3mmの鈴口は鉢と同一方向にあり、横位の突帯より上位まで切込み、鈴口端部は半円形である。胴内部には径1cm大の小石の丸が入っており、手を持って振るとカラカラと鈍い音を発する。器壁の厚さは2mm程度あり、鍛造品である。

#### (イ) 武器・農工具

##### 大刀（図版22、第22図2）

不時の発見で取り上げられたため切先部を欠損し、出土状況も左側壁前にあったこと以外は分からぬ。現存長は103.8cmで、本来は107cm前後の長い鉄製大刀である。平棟・平造りで、刃渡りは86cmあり直線的である。身部幅は欠損した切先近くで2.5cm、柄付近で3.6cm、棟の厚さは中央部で9mmを測る。片角関で、茎の長さは21.4cm、幅2.3cm、厚さ9mmあり、茎尻は一端が狭くなる。茎部の目釘穴は12cm間隔をおいて2孔ある。全体に木質が付着している。

##### 鉄剣（図版22、第22図3）

大刀同様、右側壁前からの出土以外のことは不明である。全体に鋸が激しく両刃も損傷が著しい。切先端を欠き現存長69cm、身長52cm、身最大幅4.2cmを測る。関付近での厚さは1.1cmで、茎部は長さ17cm、厚さ5mmを測る。関部は腐食により細くなり形状は分からぬ。茎部には8cm間隔で2個の目釘穴があるが、身寄りの孔は鋸により塞がっている。また、茎部関付近には鹿角の痕跡が残る。

##### 鉄斧（図版22、第22図4）

全長8.2cm、刃部幅5cm、重さ200gの小型鉄斧で、鍛造品である。側面には段は無い。折り返した袋部は折り返しの方が若干丸みをもち、その内径は1.3×3.1cmを測る。

##### 鉄鎌（図版22、第22図5）

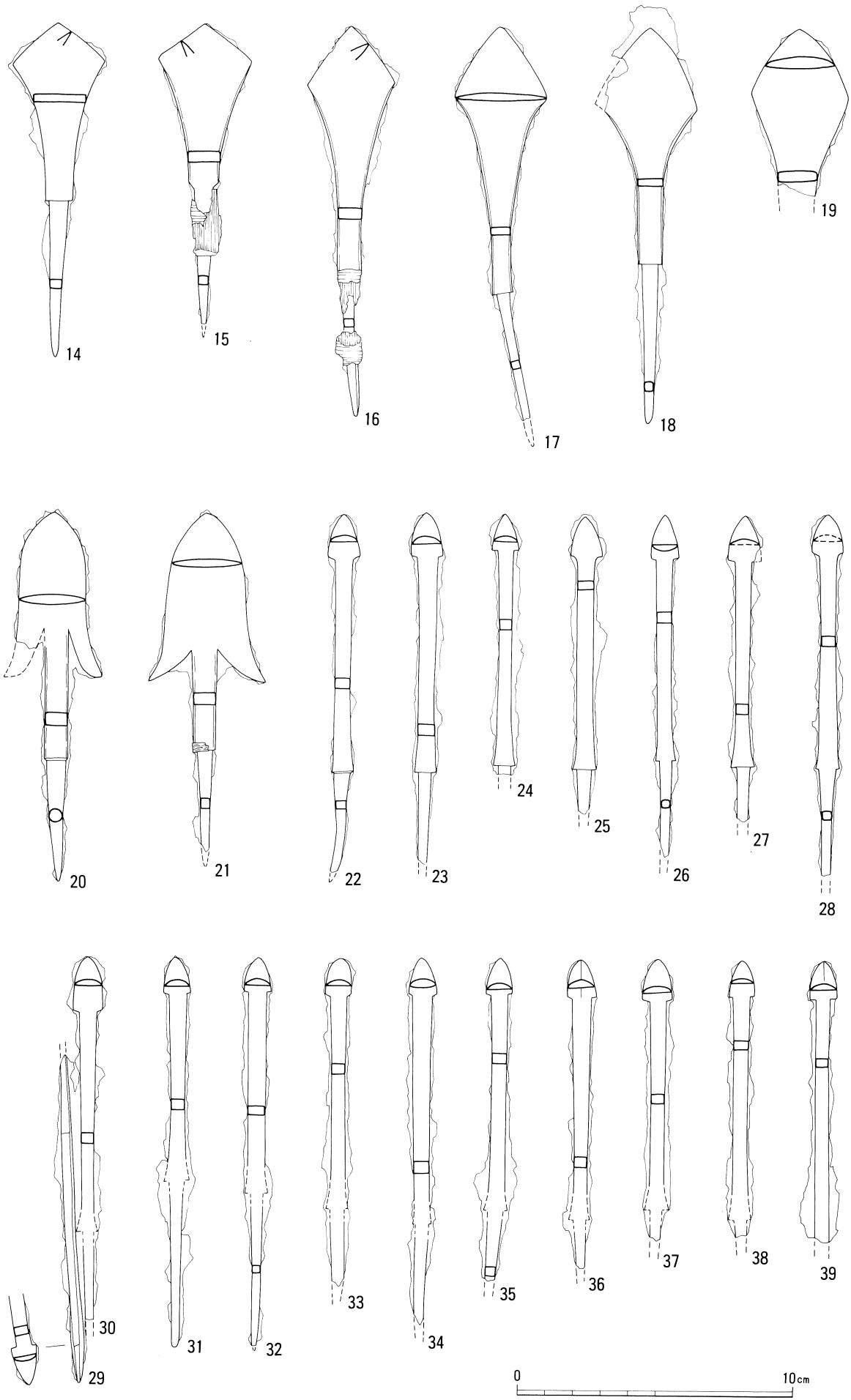
全長15cm、刃部最大幅2.6cm、背の厚さ4mmを測る。刃渡り長は約10cm、刃部はやや内湾し先端は嘴状に鋭く尖る。基部の折り返しは1cmほどである。刃部と柄との角度は約100度となる。

##### 鉄刀子（図版22、第22図6～12）

6～12は鉄刀子で、6の小型から12の大型品まである。6は全長10cm、刃部長6.7cm、身幅1cmで、茎尻は生きているか不明。背厚さは関際で3mmほどで全体的に薄い。茎には木質が銹着している。7は全長11.7cm、刃部長7.7cm、身幅は1.2cmで、身中央部での背厚さ3mmを測る。6同様細身で、関部の形状は鋸により分からぬ。茎部には鹿角柄が残存している。8は身下半以下を欠損している。背厚さは4mmある。9は茎端部を欠損し現存長10.5cm、刃部長8cm、身幅1.6cm、背厚さ3mmを測る。刃部中央が内湾し身幅に比し身長が短いのは、かなり使い込んだからであろうか。関の形状は鋸のため不明だが、茎の断面形は橢円に近い。10は全長12.5cm、刃部長8.5cm、身幅1.4cm、背は5mmと分厚い。鋸が著しく細かい形状は不明。茎の一部に木質が残る。11は縁金具が装着された刀子で、全長13.2cm、刃部長7.3cm、身幅1.6cm、背部厚さ6mmを測る。9同様身の長さが短く、茎は約6cmと長い。縁金具は関からやや茎寄りにあり、幅1.8cm、断面は円形で内径は身側で1.5cm、茎尻側1.8cmと茎尻側がやや開く。12は今次出土刀子中最長品で、全長16.5cm、刃部長12.9cm、身幅1.7cm、背厚さは中央で4mmを測る。刃部は関寄りがやや内湾している。

##### 鉄鑿（図版22、第22図13）

一見鉄鎌に見えるが先端峰部は鑿状に造られている。全長13.2cm、身部長9cm、身最大幅は関部にあり、断面は長方形で4×7mmを測る。長方形の身は先端側へ細くなり、端部は断面の薄い方が



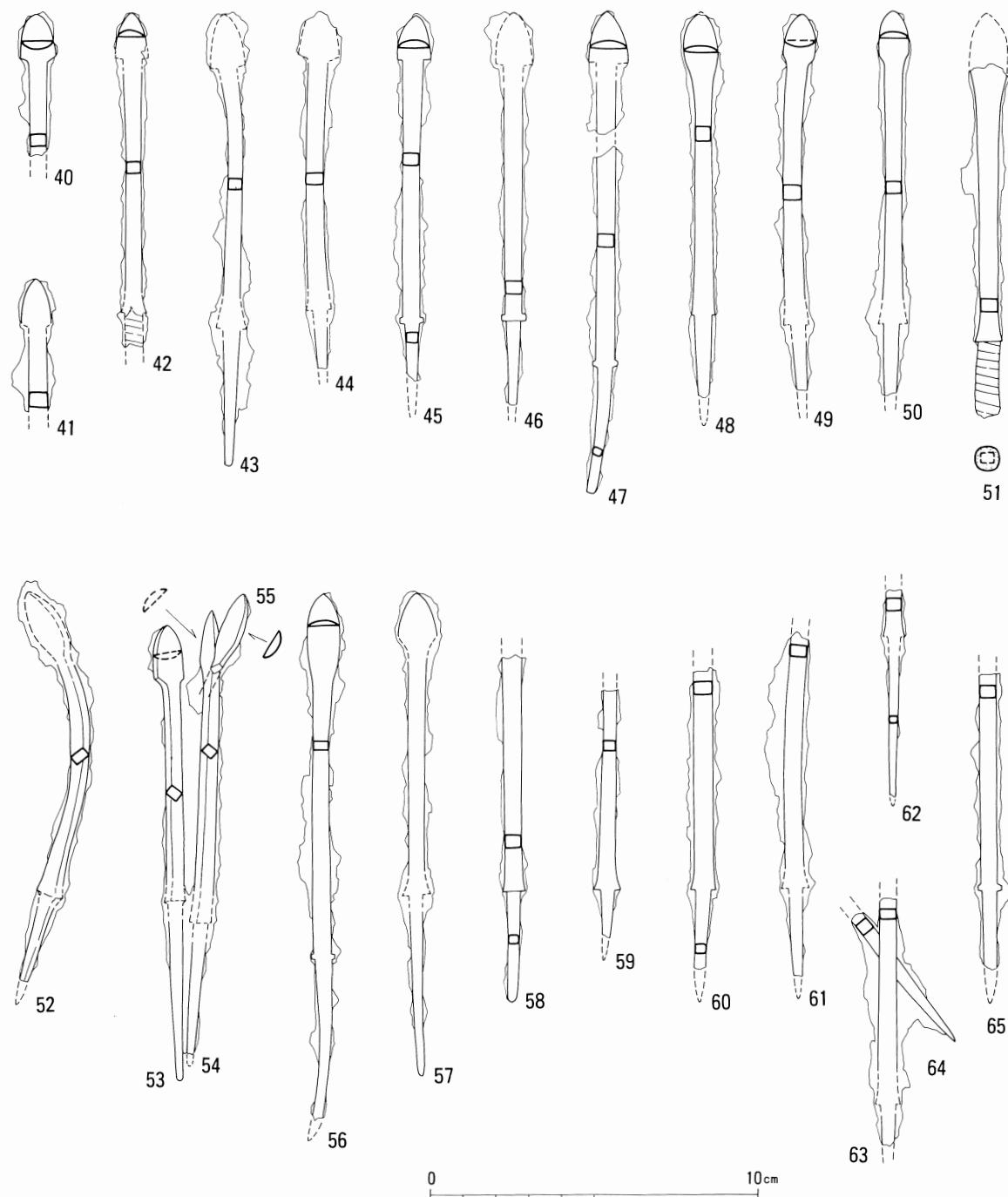
第23図 鉄製品実測図 2 (1 / 2)

鑿刃状になる。茎部は4cmと短く、木質が残っている。同時に出土した同様な形態をなす長頸鎌完形品の重量が15g前後に対し、この鑿は21gを量り、重さの点からも鎌とは異なる。ここでは鑿とする。

#### 鉄鎌（図版22、第23・24図14～65）

44本余りの鉄鎌が出土し他に破片が数点ある。ほとんどが玄室右側壁前の奥壁寄りからの出土で、出土番号で取り上げた以外は集積された状態であった。多くが鋳化して遺存状態が悪く、関部や笠被の細かい形態、特に鎌身部の断面などは観察不能なため、鎌身部の大まかな形態分類に留めた。

14から19は鎌身部が圭頭類をなすもので、峰のふくらは14～16は直線的、17～19は孤状となる。17は鎌身部の中程がくの字状に折れ曲がるが、全長12.2cm、身幅3.3cm、18gを測る。15は現存長



第24図 鉄製品実測図3 (1 / 2)

11.8cm、身幅3.3cm、26gを測る。鎌身部の鋒膨れが著しい。茎部には樺巻きが残る。16は全長14cm、身幅3.2cm、29gを測る。茎部には樺巻きが残る。17は現存長14.1cm、身幅3.3cm、26gを測る。19は鎌身部下半以下を欠損する。身幅は3.5cmある。20・21は鎌身部が三角類・逆刺を持つもので、20は、片方の逆刺端を欠くが全長13.3cm、25gを測る。逆刺の開きは細く狭い。21は茎端を欠き、現存長12.2cm、身最大幅4.3cm、31g。逆刺の開きは広く太い。笠被部に樺巻きが残る。

22から57は鎌身部が長頸類となる鎌で、関部の形態が直角あるいは鈍角な22~47と、不明瞭な48~57とに分けられる。さらに、鎌身の断面形や笠被の形態でも数種に区分されようが、鋒で不明瞭な点も多く識別は困難。ただ、45~47の笠被は両側に角張って突起する。22は茎端部を僅かに欠くが現存長12.3cmで、鎌身部は長さ1.7cm、幅1.1cmの二等辺三角形をなす。笠被部長は7.6cm、茎部長は約4cmで、重さは13g。22以下47までの鎌はほぼこの形式で、サイズも多少の差異でしかない。28は15g。31は完形品で全長14cm、14g。45~47は前述したように、笠被が角張って突起を造るタイプである。48~57は、関の形状が曲線的で不明瞭となる類で、56は茎端部を欠くが現存長16cmで、15g。57は完形品で14.6cm、13gを測る。58から65は鎌下半部のみの折損品である。

#### (ウ) 石製品

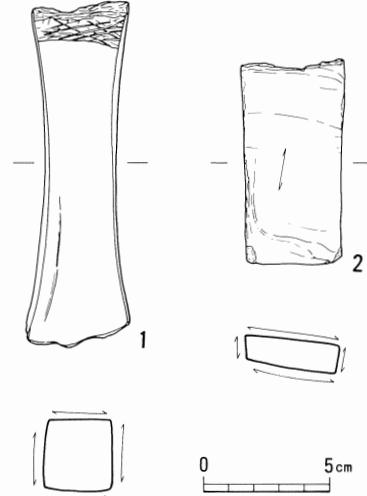
##### 砥石 (図版22、第25図1・2)

上面敷石上から2点の砥石が出土し、1は右側壁前の奥壁寄り、2は羨道寄りにて出土した。1は両端が欠け、現存長14.7cm、幅4.1cm、体部は直方体で中央部厚は2.6cmと薄い。重さは270g。折れた小口の一端には鋭利な線条痕が不定方向に走る。石肌は木目細かく滑らかで仕上げ用砥石であろう。淡茶白色の硬質砂岩である。4面とも使われ、いずれも面中央部が盛り上がっている。2は一端が折れ、現存長8.1cm、幅3.8cm、重さ95gある。体部は偏平で中央部は薄くなる。石肌は気泡状の小孔が多くややざらつく。石質はアプライトに似る。4面とも使っている。

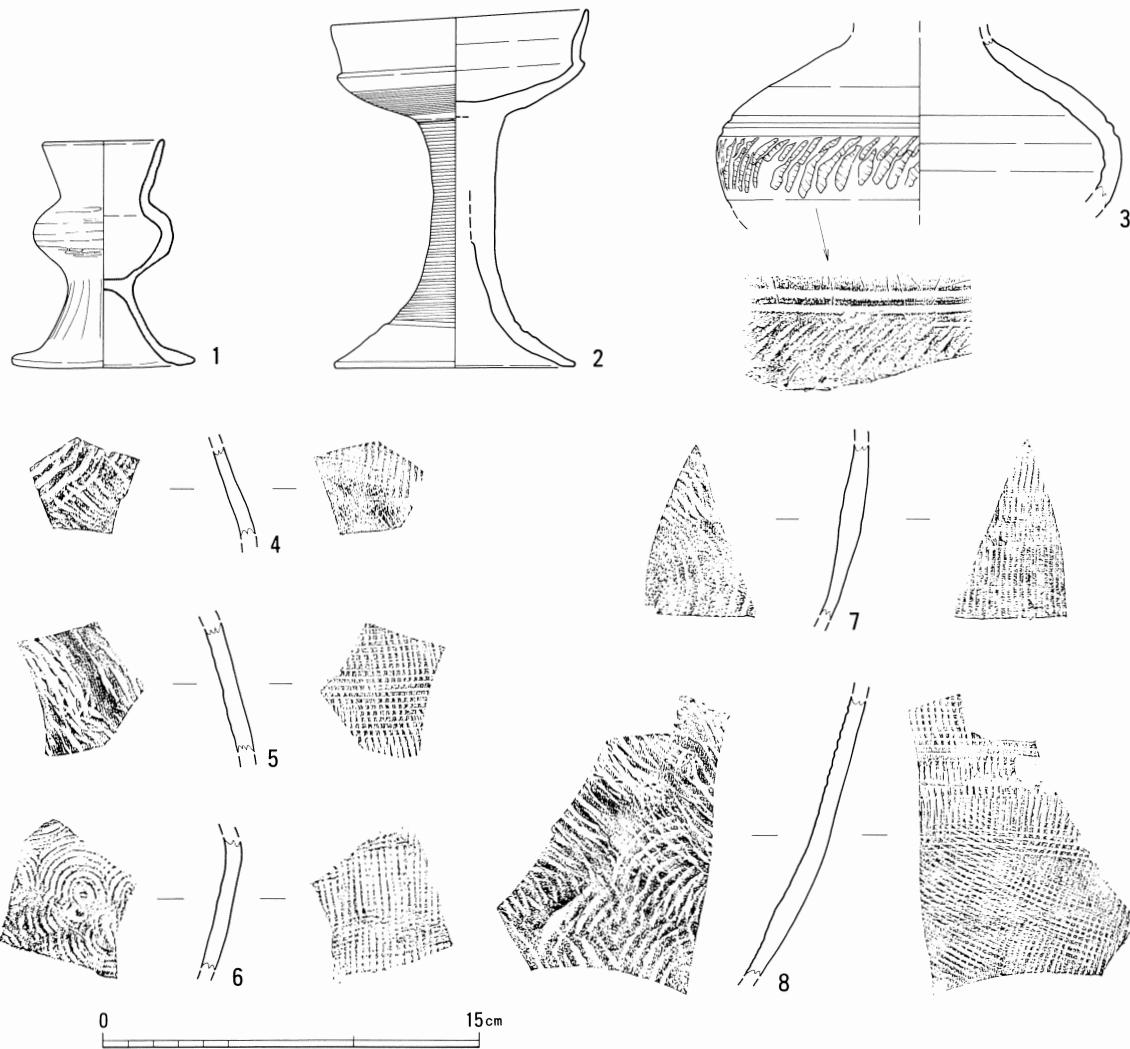
##### (エ) 土器 (図版21、第26図1~8)

玄室内副葬品としての土器の出土ではなく、墓道埋土から完形品の須恵器高杯1と土師器脚付小壺1、それに須恵器長頸壺と甕の破片数点である。

1は土師器脚付小壺で口縁の半分を欠く。口径約5cm、高さ5.5cm、胴部径5.6cmの小壺に高さ3.5cmの脚が付き、器高9cmを測る。頸部は直線的で内外面は横ナデ、胴部は扁球形で外面は丁寧な磨きである。胴下半から脚部の一部は折損し、脚裾端は大きく開く。焼成は良好で、胎土は赤褐色粒や金雲母片を若干含む。色調は黄褐色を呈す。2~8は須恵器である。2の高杯は口縁部を半分欠損し径約10cmある。器高13.8cm、底径9.6cm。口縁部上半は内湾して立ち上がり、体部下半には強く張る明瞭な段を造る。この段やや下位から杯内面は回転ナデ、内底面はナデである。杯底外面は細かいカキ目がはいる。脚柱部は細くて長く、透しはない。裾部中位には1条の沈線が巡り、下半はラッパ状に開く。脚柱外面は沈線部まで粗いカキ目を施し、内面にはシボリ痕が見られる。胎土は微砂粒多く含み、焼成は堅緻である。杯部内外面は灰被りにより灰黒色を呈す。また、脚裾は焼き歪み、口縁部内面には土器融着の痕跡が認められる。3は長頸壺の胴部破片で、おそらく脚



第25図 石製品実測図 (1/3)



第26図 土器実測図（1/3）

部に台が付くであろう。胴復原径は約16cmで扁球形となり、肩下位に2条の浅くて粗い沈線を施し、胴最大部に大雑把な刺突文を付ける。胎土は精良で、焼成も良い。色調は黒灰色で、外面肩部には自然釉と土器融着の痕跡が認められる。4から8は甕破片である。4の外面は平行タタキ、内面は青海波のあて具痕が残る。5の外面は縦位の平行タタキの後横位のカキ目、内面は青海波のあて具痕が残る。6は外面格子のタタキ後横位のカキ目である。7は外面縦位の平行タタキ後横ナデ、内面は青海波のあて具痕が残る。8は外面上半は平行タタキ下半は格子タタキ後横位のカキ目、内面は青海波の当て具痕が残る。これら4～8の須恵器甕破片は同一個体かどうかは不明。

#### 4. おわりに

今回発掘調査を行った野添遺跡群では、土壙墓3基と、横穴墓1基が発見された。3基の土壙墓のうち、1基は2段掘りの上段墓壙に石で蓋をする石蓋土壙墓（1号土壙墓）で、他の2基の土壙墓は1段掘りで蓋類は遺存せず、墓壙構造の違いから2種類が混在したことになる。また、墓壙の主軸も1・2号土壙墓は尾根と直交、3号土壙墓は平行と埋葬方向にも2種類がある。1号土壙墓

はベンガラの塗布と棺底枕の存在から厚葬されたことがわかる。しかし、いずれの土壙墓からも出土品がなく時期の判断ができないが、概ね弥生時代後期の墳墓と考えられる。こうした石蓋土壙墓類は、方城町内では当遺跡の西に谷を隔てた追遺跡でも多数の石棺墓群に1基混在しており、この時期の埋葬施設は石蓋土壙墓が主流ではなく、多数の石棺墓群中に少数が混在する形で墳墓群が形成されたものであろう。

また、調査の時期を異にして横穴墓1基を発掘した。土取り工事中の発見で、天井の一部を損壊したが未開口墓であった。1墓道1墓室で、玄室平面は約1.9m四方の正方形、立面形は高さ約1mの天井の低いドーム形となる。玄室床面には墓道半ばまで延びる排水溝を掘り、蓋石を被せていく。床面は二面の敷石があり、上面敷石は追葬時のものであろう。羨道部床面は玄室より高く天井部はアーチ形となろう。羨門墓道側入口は飾り縁状の門構えとなり、この箇所に板石1枚を立て掛け閉塞している。墓道は羨道床面より低くなり、中程の箇所で墓道と直交する溝が掘られ、玄室から延びる排水溝はここで終わっている。

未開口であったため、副葬品は刀・剣を除いて埋葬時の状態で発見された。刀以外の副葬品のはほとんどは玄室右側壁前に置かれ、上面敷石上では釧・鈴の装身具、武具、農工具や砥石と勾玉1点が、下面敷石上では玉類のほとんどが出土した。上面敷石出土品は追葬時、下面敷石出土品は初葬時の副葬品であろう。すると、初葬時の埋葬者は装身具類が多いことから女性、追葬時は武具・農工具類が主体であることから男性と考えたい。なお、追葬時の大刀・剣が両側壁沿いに置かれていたことから、遺体は主軸方向に埋葬されたと推測する。

玄室出土副葬品は各種の遺物がある。とくに、銅釧・銅鈴の出土は珍しく貴重な資料となったが、釧は盗難に遇い残念である。なお、銅釧の出土は野添横穴では2例目で、先に触れた昭和49年の農道工事の際にも発見されている。また、銅鈴は県内では10箇所以上の遺跡や古墳で出土例があるが、筑豊地区からは初例であろう。武具と農工具が多いのも特徴で、とくに鉄鏃は44本と多量である。一方、土器類は墓道のみの出土で、土師器脚付小壺は県南の筑後地方に類例が多い。さらに、玄室内に土器の副葬がないことも特筆すべきことで、当遺跡下流域に所在する直方市水町横穴墓では、群中最古（6世紀中ごろ）の横穴墓には玄室内に土器が持ち込まれていないことが確認されている。今回墓道出土の土器からみたA-1号横穴墓の年代は6世紀後半から末であろうが、1墓道1墓室や玄室方形プランといった横穴墓の形態や、上述の水町横穴墓の例などからして、初葬時の年代は6世紀後半でもやや古い時期と考えられる。

最後に、今回の調査は緊急処置とはいえ、弥生時代土壙墓群と、豊富な副葬品を持った古墳時代横穴墓の発見は、未解明部分が多い田川地方の弥生時代墳墓の、また、多数存在しながら調査例の少ない野添横穴墓群の今後の究明に期待を抱かせる契機となるであろう。ひいては、方城町内のみならず、田川郡内でも残り少なくなった複合墳墓群として、ぜひとも保存したい遺跡である。

#### [参考文献]

方城町誌編纂委員会編 『方城町誌』 1969

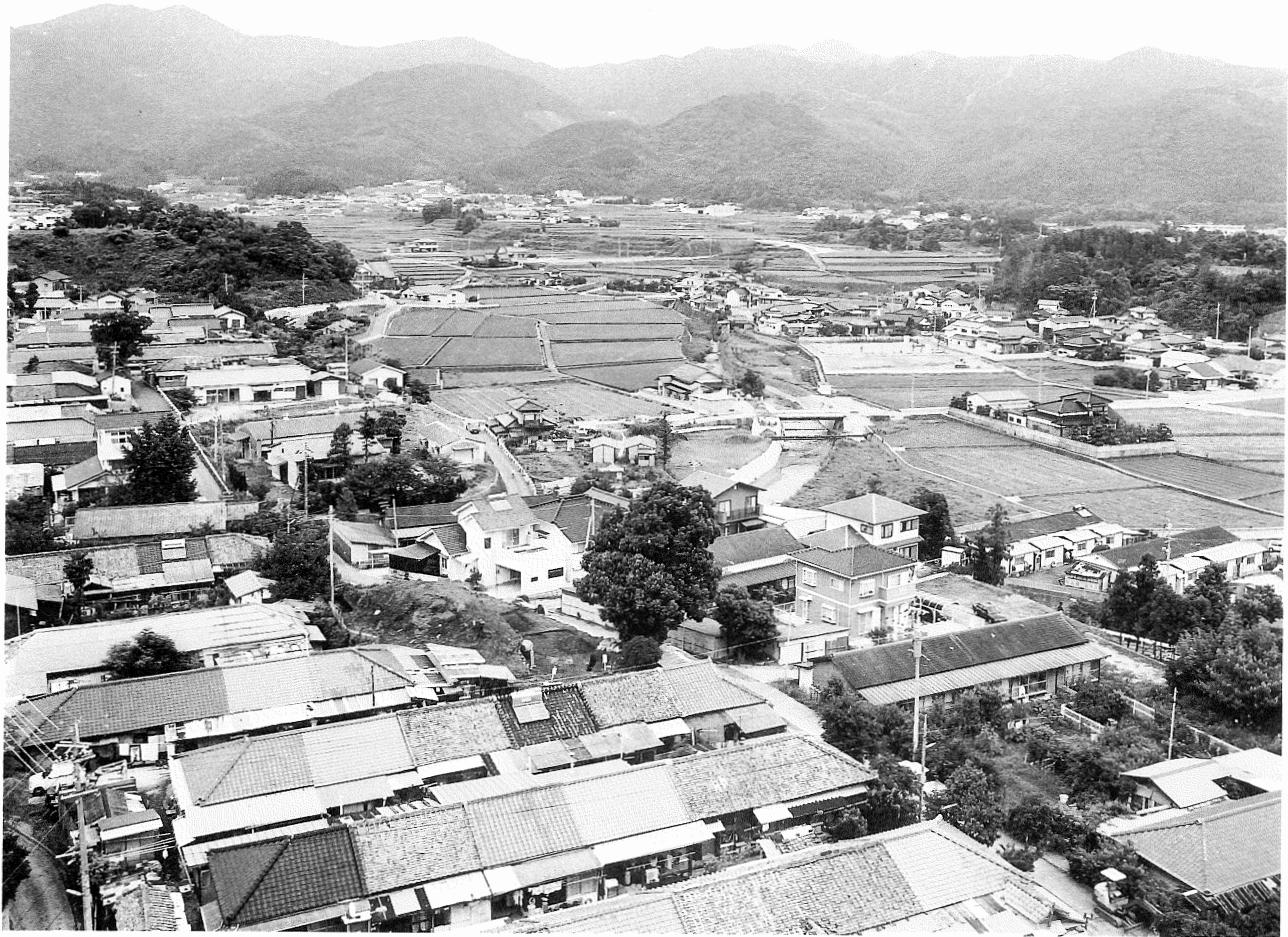
古野 徳久 「古墳時代鉄鏃の編年—北部九州を中心として—」 『九州考古学』 第64号 1989

長谷川清之 「遠賀川流域における横穴墓の研究」 『児嶋隆人先生喜寿記念論集』 1991

田村 悟編 「水町遺跡群」 『直方市文化財調査報告書』 第20集 直方市教育委員会 1997

白木原 宜 「古墳時代の鈴—主として鋳造鈴について—」 『HOMINIDS』 1号 1997

# 図 版



(1) 伊方古墳遠景 1 (南西から)



(2) 伊方古墳遠景 2 (北東から)

図版 2



(1) 伊方古墳全景 1 (南西から)



(2) 伊方古墳全景 2 (南東から)



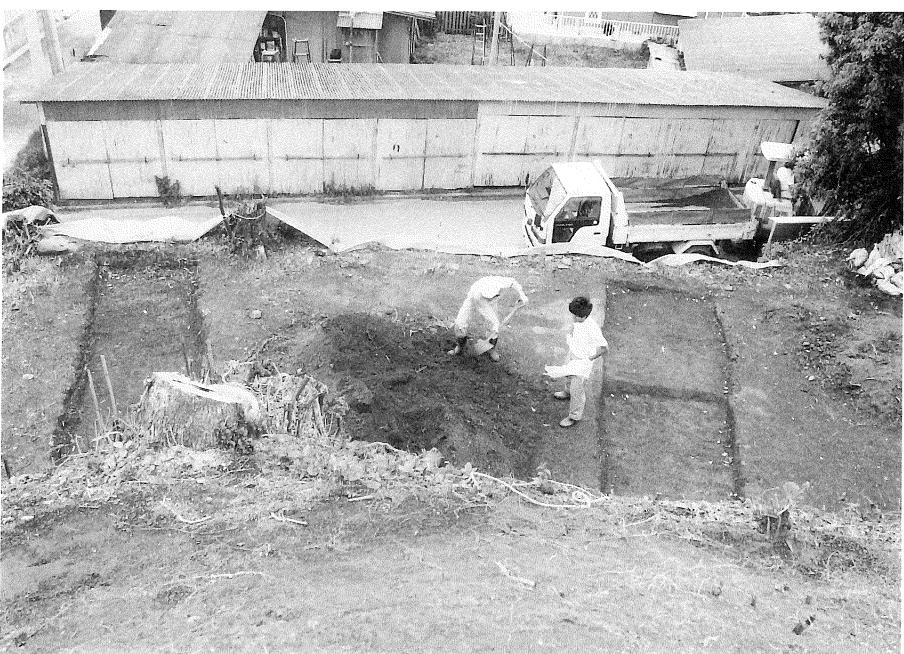
図版 4



(1) 第1・2トレンチ（南西から）



(2) 第2・3トレンチ（西から）



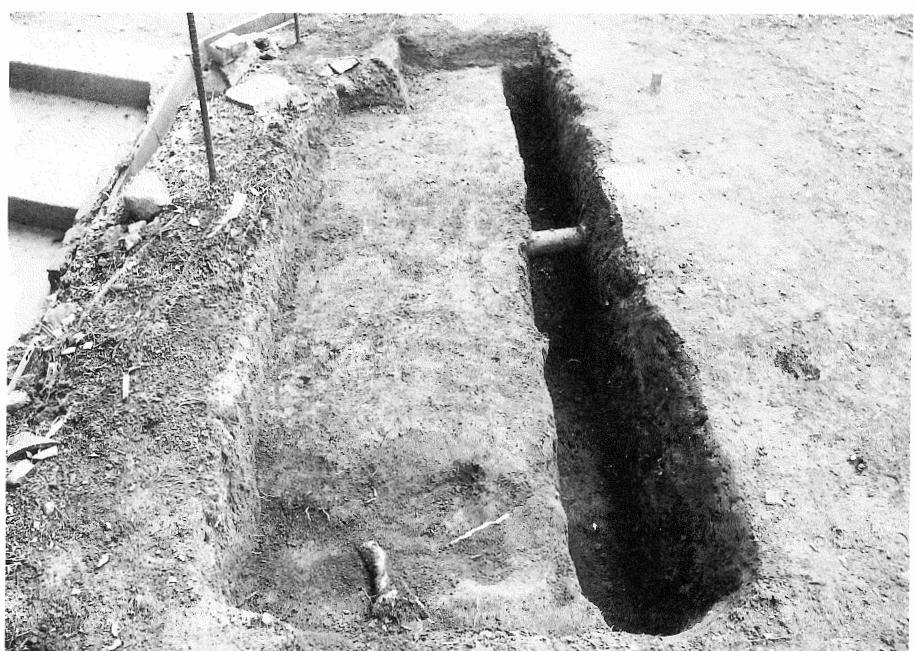
(3) 第3・4トレンチ（北西から）



(1) 第1トレンチと墳丘断面（北東から）



(2) 第4トレンチと墳丘断面（南東から）



(3) 第5トレンチ（東から）

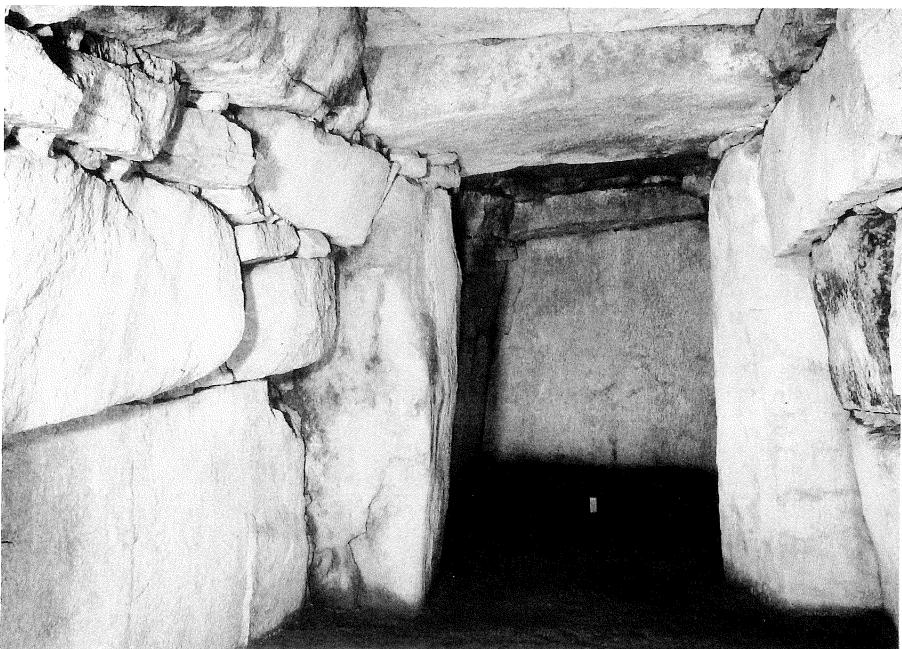
図版 6



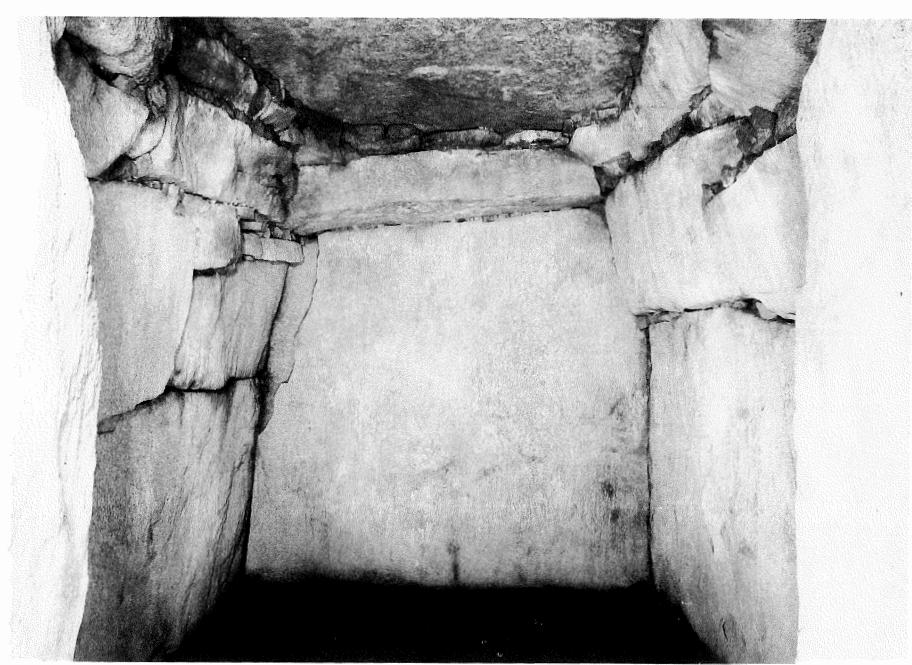
(1) 石室全景（入口から）



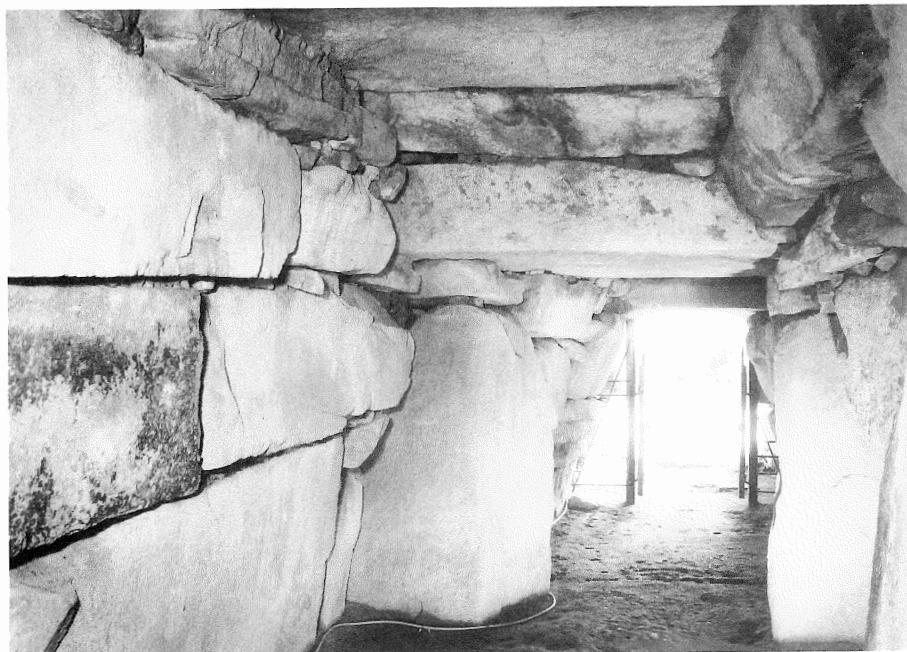
(2) 前室右側壁（入口から）



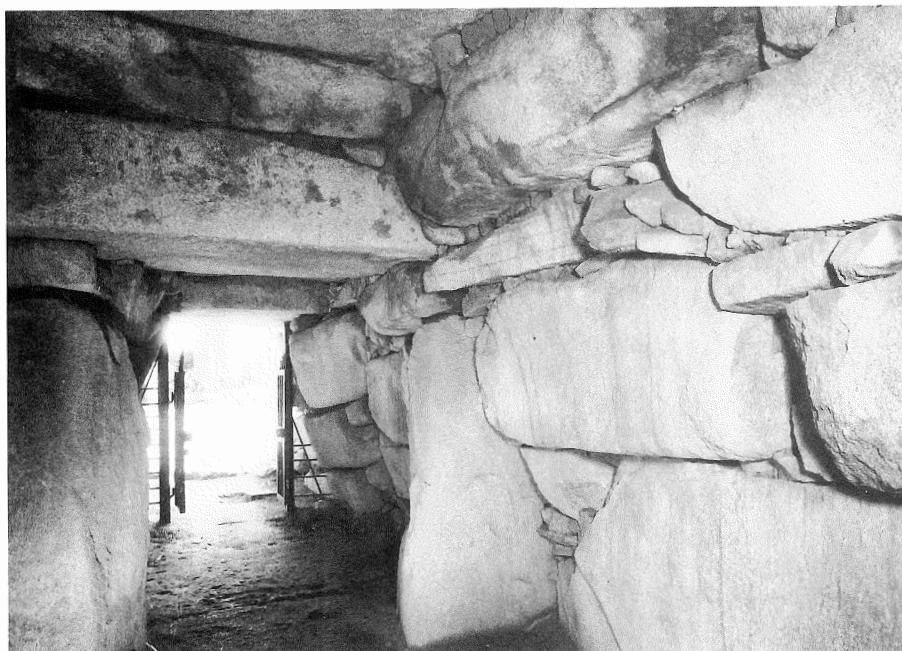
(3) 前室左側壁（入口から）



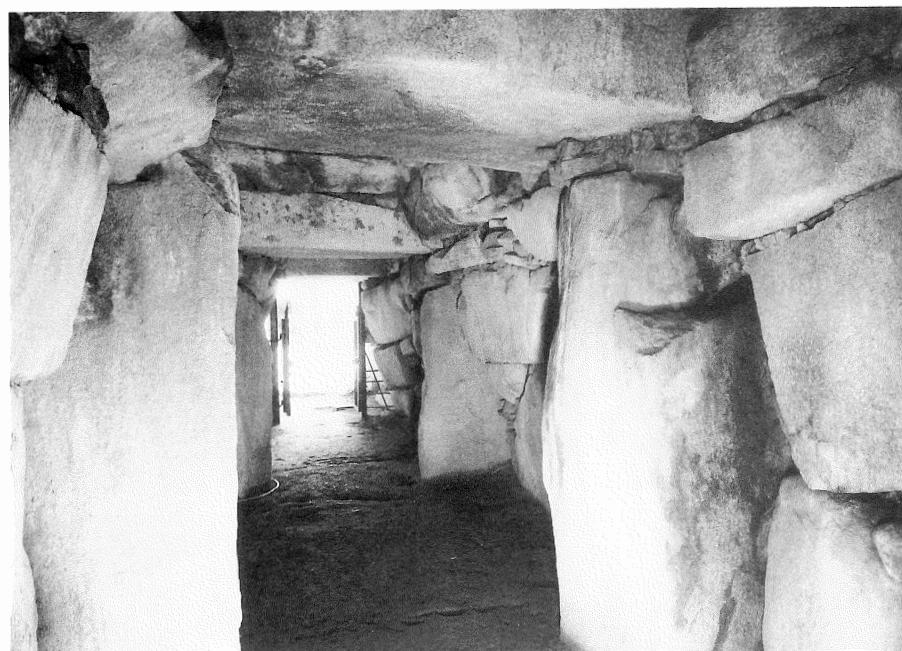
図版 8



(1) 前室右側壁（玄室から）



(2) 前室左側壁（玄室から）



(3) 石室全景（玄室から）



(1) 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅および岩屋大スギ全景 1 (南東から)



(2) 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅および岩屋大スギ全景 2 (南西から)

図版 10



(1) 梵字全景（南西から）



(2) 岩屋の大スギ（北西から）



曼荼羅（南から）



(1) 銘文 (南から)



(2) 梵字近景 (南西から)



(1) 第1・2トレンチ 1 (南西から)



(2) 第1・2トレンチ 2 (南西から)

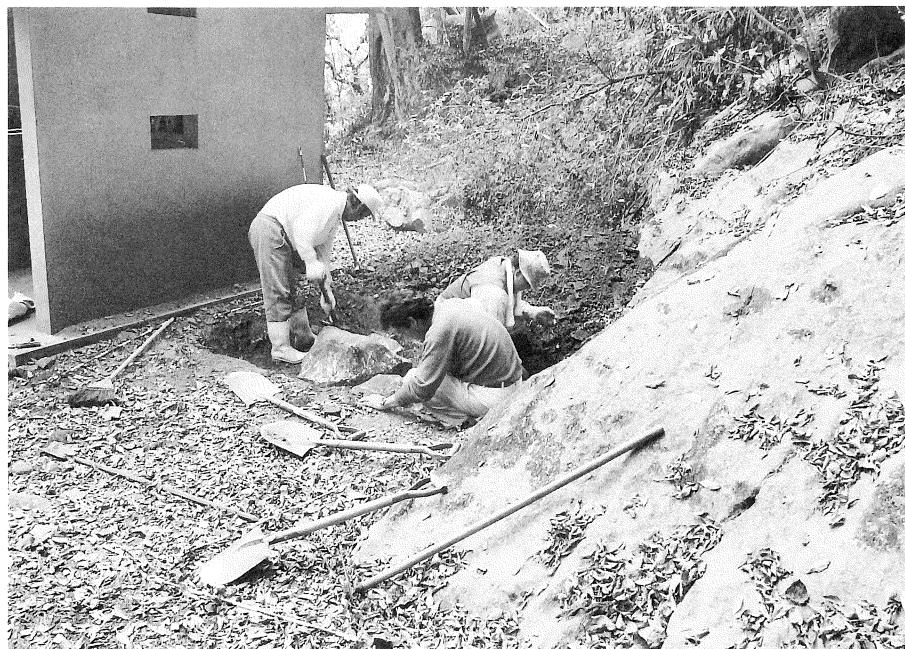


(3) 第1トレンチ (南から)

図版 14



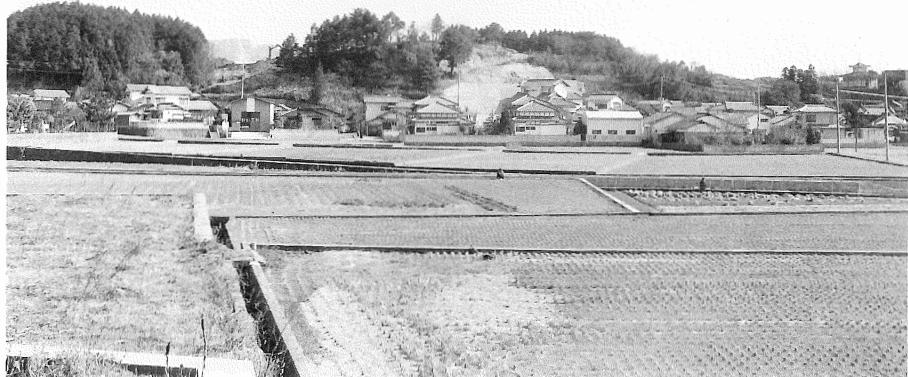
(1) 第2トレンチ（南から）



(2) 第3トレンチ調査風景（東から）



(3) 第3トレンチ（南東から）



(1) 野添遺跡群遠景（西、彦山川から）

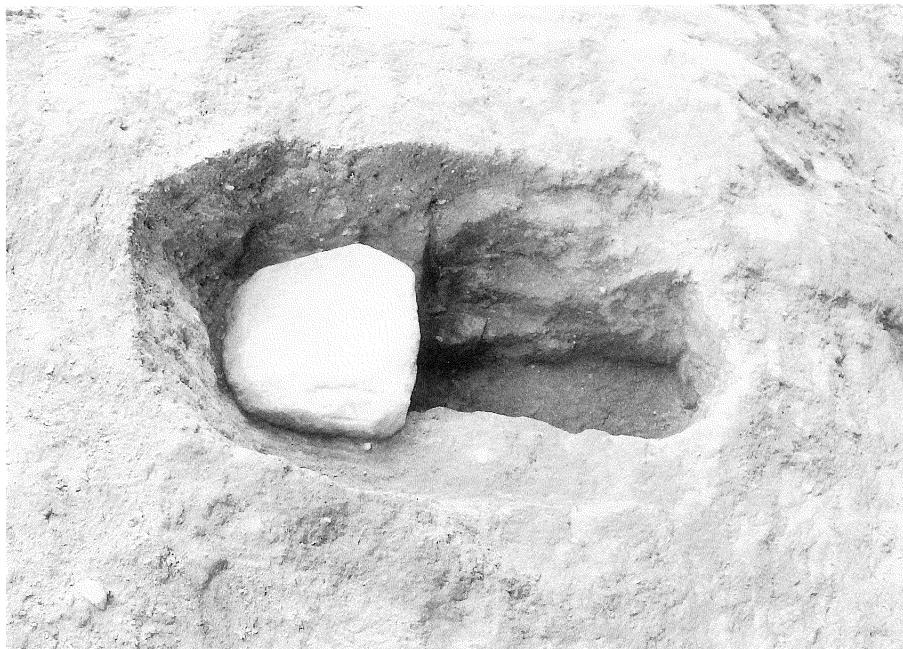


(2) 野添遺跡群近景（東から）



(3) 野添遺跡群全景（北から）

図版 16



(1) 1号石蓋土壙墓（北から）



(2) 1号石蓋土壙墓（西から）



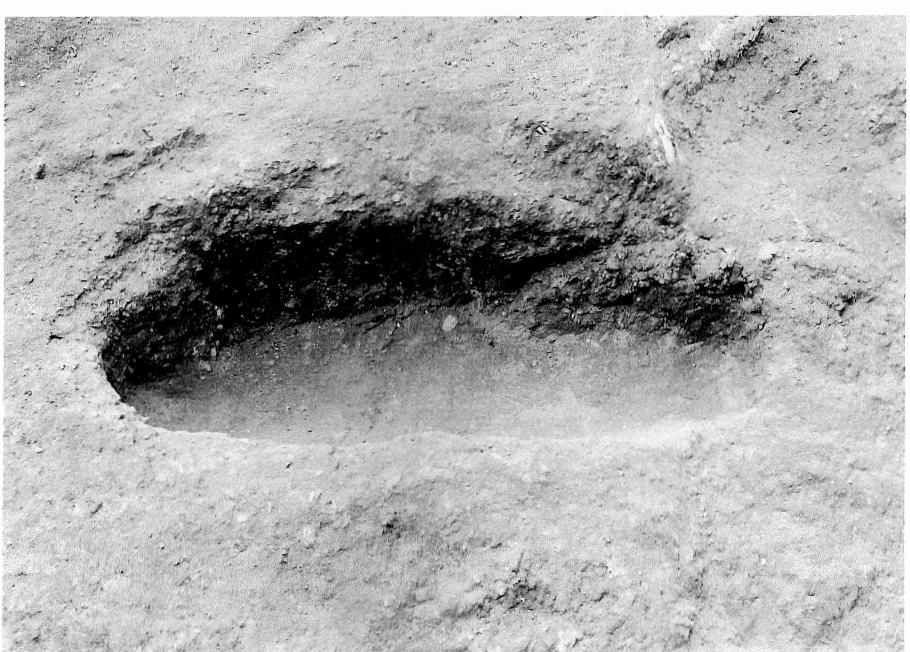
(3) 1号石蓋土壙墓蓋石除去後（西から）



(1) 土壙墓群近景（北から）



(2) 2号土壙墓（北から）



(3) 3号土壙墓（西から）

図版 18



(1) A-1号横穴墓全景（西から）



(2) A-1号横穴墓全景（東から）



(3) 玄室閉塞状況（西から）



(4) 排水溝蓋石（西から）



(1) 玄室上面敷石（西から）



(2) 玄室閉塞状況（西から）



(3) 閉塞石除去後と排水溝（西から）

図版 20



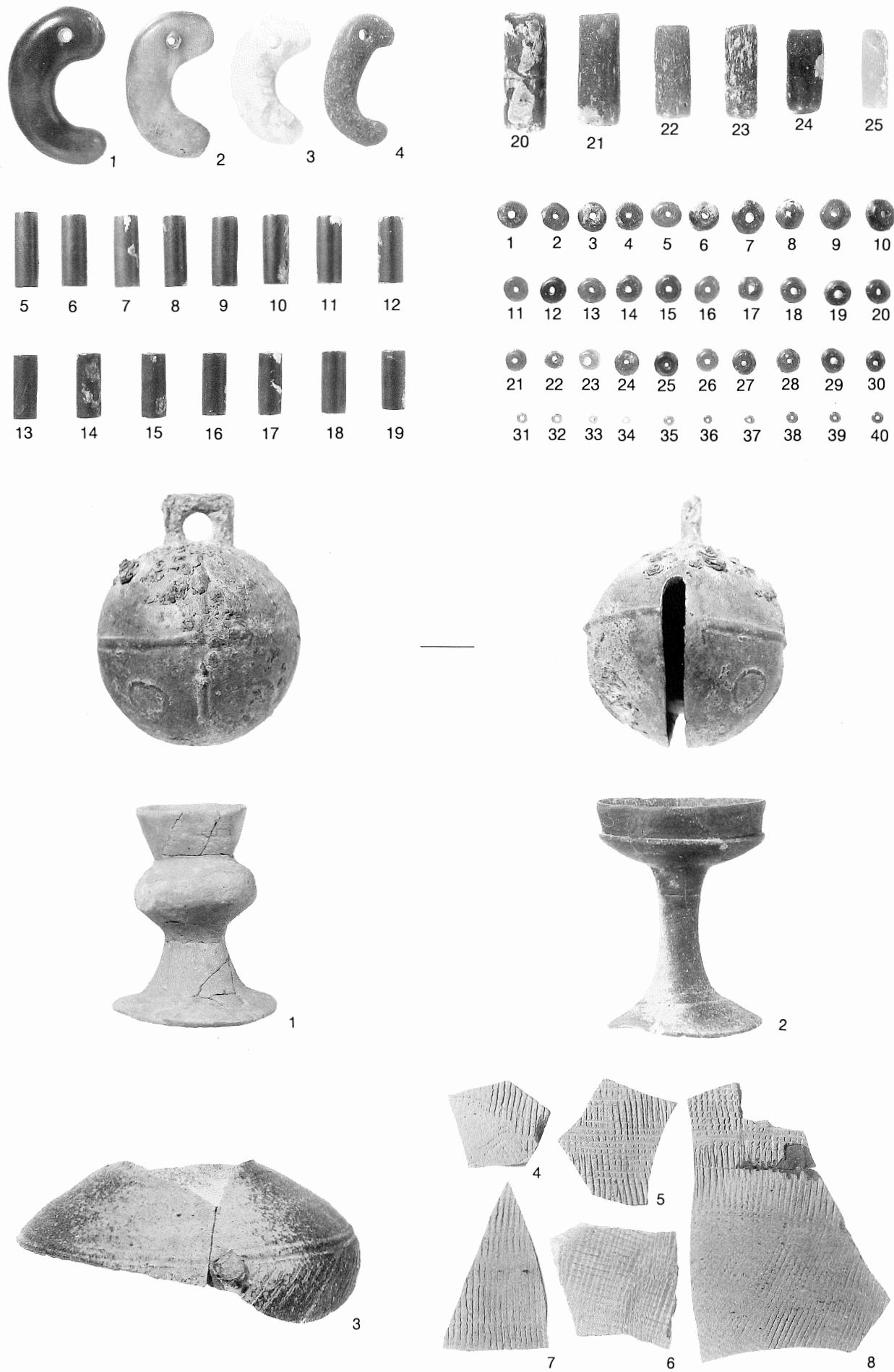
(1) 大刀出土状況（南から）



(2) 鉄剣・鉄鎌出土状況（北から）

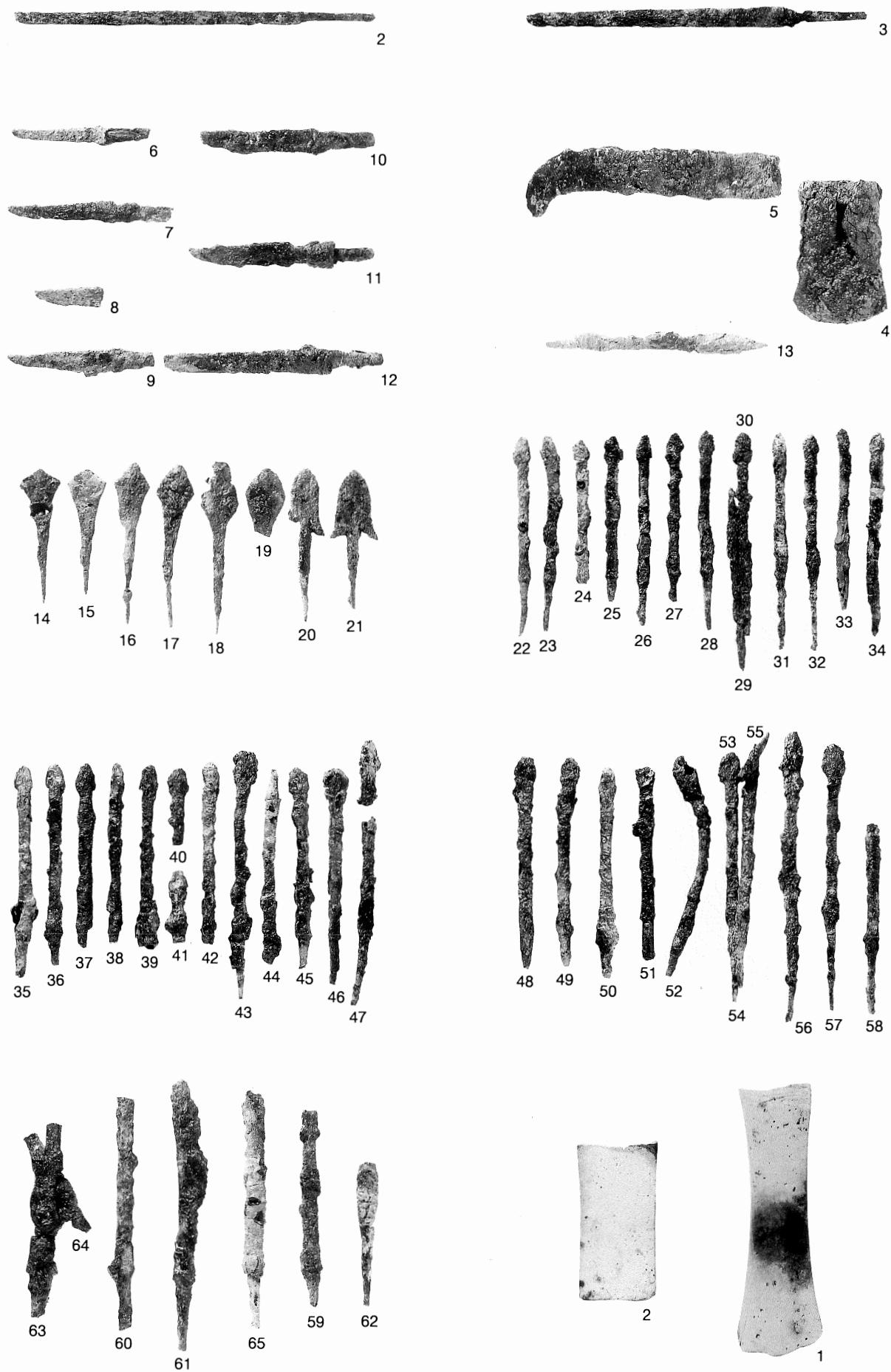


(3) 銅鈴・鉄鎌出土状況（西から）



出土遺物（装身具、土器）

図版 22



出土遺物（武器、農工具、石製品）

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	いかたこふん ほうじょういわやまがいほんじまだら のぞえいせきぐん						
書名	伊方古墳 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅 野添遺跡群						
副書名	福岡県田川郡方城町所在遺跡の発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	方城町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第5集						
編著者名	水ノ江和同 新原正典						
編集機関	方城町教育委員会						
所在地	〒822-12 福岡県田川郡方城町大字伊方4480						
発行年月日	西暦1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
市町村	遺跡番号	° / °	° / °	° / °			
いかたこふん 伊方古墳	ふくおかんたがわぐんほうじょうまち 福岡県田川郡方城町 おおあざいかたあざいしまる 大字伊方字石丸3946 番地		33°42'10"	130°48'10"	1997.6.13 ~10.20	76m <sup>2</sup>	崩落した 石垣の復旧
ほうじょういわやまがい 方城岩屋磨崖 ばんじまんだら 梵字曼荼羅	おおあざべんじょう 大字弁城165番地の2	406074	33°43'30"	130°48'20"	1997.11.11 ~11.17	10m <sup>2</sup>	公園整備
のぞえいせきぐん 野添遺跡群	おおあざいかたあざのぞえ 大字伊方字野添2407 番地		33°42'10"	130°48'20"	1990.2.1 ~2.9 1990.8.22 ~8.30	400m <sup>2</sup>	宅地建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
伊方古墳	古墳	古墳後期	周溝・墓道は削平され遺存しない	須恵器甕口縁部	福岡県指定史跡 全長11.6mの3室構造の横穴式石室		
方城岩屋磨崖 梵字曼荼羅	修驗道	14世紀	——	——	福岡県指定史跡 建武2年(1335)の紀年銘あり		
野添遺跡群	弥生後期 古墳後期	弥生後期 古墳後期	石蓋土壙墓3基 横穴墓1基	横穴墓から 銅剣・銅鈴・勾玉 管玉・ガラス丸玉 ガラス小玉・大刀 鉄劍・鉄鎌・鉄斧 鉄鎌・鉄刀子 鉄鑿・砥石・土器	弥生時代墓地と古墳時代横穴墓群		

